

日本女子大学の草創期における欧米思想の受容
——女性の自立と平和をめぐる
卒業生たちの活躍——

Western Thought in the Foundation of Japan Women's University
and Naruse Jinzo's and Early Graduates' Social Movements for Peace

内 山 加奈枝 UCHIYAMA Kanae
(研究代表者 日本女子大学文学部英文学科教授)

高 村 宏 子 TAKAMURA Hiroko
(日本女子大学卒業生 元・婦人国際平和自由連盟理事)

増 子 富 美 MASUKO Fumi
(日本女子大学名誉教授)

三 神 和 子 MIKAMI Yasuko
(日本女子大学名誉教授)

牛 山 通 子 USHIYAMA Michiko
(日本女子大学卒業生 婦人国際平和自由連盟理事)

高 梨 博 子 TAKANASHI Hiroko
(日本女子大学文学部英文学科教授)

増 田 和香子 MASUDA Wakako
(文化服装学院専任講師、日本女子大学非常勤講師)

目 次

はじめに	内山加奈枝
第1章 成瀬仁蔵の平和思想 ——キリスト教主義「人格」教育から帰一思想へ——	内山加奈枝
第2章 上代タノ——平和への志と欧米女性との交流——	高村 宏子
第3章 婦人平和協会の設立と女性たちに及ぼした影響	増子 富美
第4章 ジェーン・アダムズの平和思想 ——『平和の新しい理想』を手掛かりに——	三神 和子
第5章 平和を祈りて——磯野富士子と WILPF——	牛山 通子

はじめに

内山加奈枝

UCHIYAMA Kanae

日本女子大学の設立と女子教育は、創立者成瀬仁蔵（1858-1919）のキリスト教徒としての信仰生活、欧米思想の受容、米国留学、および留学後に展開した婦一思想からなる独自の思想を土台に形成され、成瀬が自ら力を注いだ人格教育は、本学草創期の卒業生たちの平和思想と、それを実現化するために行った社会活動に多大な影響を与えた。

第一次大戦が勃発した翌年1915年、中立国であったオランダのハーグに欧米12カ国から千人強に及ぶ女性参政権運動活動家が集結した。彼女たちは「戦争中止と平和の確立」を決議し、諸国に休戦を呼びかけた。この第1回目の会合に東アジアの女性は参加しておらず、当時スコットランドにあった国際会議の事務局（「婦人国際平和自由連盟」の前身）は、戦後すぐに開催予定の第2回目大会にアジア諸国からの女性の出席を求む旨の要請状を、日本では女子高等教育に携わる校長あてに10通ほど送付した。そのなかで、この国際的な女性による平和活動の要請に答えたのは、成瀬仁蔵ただひとりであった。成瀬は返信において、国際平和協会の女性支部を日本に設立するためには、まずは設置委員会を作る必要があるという考えのもと、津田梅子など適任と思われる女性たちに連絡した旨を伝えている。

まもなくして病に伏した成瀬は、教育と社会活動の盟友、新渡戸稲造（1862-1933）にその後の対応を託して逝去した。成瀬と新渡戸の国際平和への思いは、両者の教え子である上代タノ（第6代目学長）に引き継がれている。成瀬が亡くなる半年前（1918年の秋）に、新渡戸は成瀬の意向をくみ、自宅にて国際問題研究会を催した。このとき、井上秀（第4代学長）らと共にはじめて参加した上代タノ（1886-1982）は、1921年に婦人平和協会の結成を参画し、役員となる（会長は井上秀）。1923年、米国の社会事業者で、のちにノーベル平和賞を受賞するジェーン・アダムズ（Jane Addams, 1860-1935）が来日した際には、アダムズの薦めで婦人国際平和自由連盟（Women's International League for Peace and Freedom: WILPF）に加入することが決定、翌年には WILPF の日本支部として正式に認められた。1926年、ダブリンでの WILPF 第5回総会時には、上代が日本支部の代表として出席。ここで日本支部による初めての報告を行って以降、難民救済事業や講演会・文筆活動に励み、平和思想の啓蒙に尽力した。現在 WILPF は、国際本部をスイスのジュネーヴに、支部を世界40ヶ国に置いているが、1923年（WILPF の前身をふくめると1921年）から現在にいたるまで日本支部は、100年以上にわたり日本女子大学に設置されている。

第二次世界大戦期、婦人平和協会は国策により解散を余儀なくされるが、上代は戦後、同協会を「日本婦人平和協会」として再興、会報『婦人と平和』を毎月発行し、平和精神の伝道に努めた。また1955年には、湯川秀樹や平塚らいてうらの識者と共に、無党派の「世界平和アピール7人委員会」を創設し、核兵器廃絶や国連の改革を熱心に訴え、WILPF の国際本部理事としても活躍した。また1971年に、上代が大学図書館に寄贈した資料をもとに「上代タノ平和文庫」が開設されてからは、戦争と平和を主題にした書籍が継続的に収集、提供されており、今なお平和を希求する精神が受け継がれている。

上代は2つの大戦を生き、終生にわたって平和活動に努めたが、21世紀の今、ロシアによるウクライナ侵攻、イスラエル軍によるパレスチナ自治区ガザ地区への侵攻など戦火は絶えない。グローバル社会が抱える紛争問題に容易な答えを出すことはできないが、創立者成瀬仁蔵の平和思想、および、それを生きたものとして受け継いだ卒業生の思想と活動を継続的に想起し研究することは平和活動の一部になると思われる。そのような目的のもと、本研究を以下に構成する。

第1章では、キリスト教主義教育と伝道活動において、「独立自給主義」をめぐり、成瀬仁蔵が直面したであろう「内」と「外」を分ける困難が、帰一思想、ならびに平和思想に結実していく過程を考察する。

第2章では、上代タノが欧米留学から帰国後、平和への志をどのように育み、学園の平和主義の伝統構築に貢献したか、ジェーン・アダムズはじめ平和や女性の権利を主張して活動する欧米の女性たちと交わした書簡類（成瀬記念館所蔵）から探る。

第3章では、婦人国際平和自由連盟（WILPF）の呼びかけをきっかけとして、1921年発足した婦人平和協会について、家庭週報、婦人平和協会会報、成瀬記念館所蔵資料等から女性たちの考えや行動に与えた影響を検討する。

第4章では、セツルメント活動と平和活動に献身したジェーン・アダムズ（Jane Addams, 1860-1935）の平和思想を、1907年に出版された『平和の新しい理想』（*Newer Ideals of Peace*）を手掛かりに解明する。

第5章では、日本女子大学英文科卒業生で、モンゴル研究家の磯野富士子（1918-2008）とWILPFでの平和活動の関りについて、日本支部の機関紙『婦人と平和』を資料とし、検証、考察する。

本研究は、2021年度、22年度、23年度に公開講演会を実施した。各年度に講師としてお招きした和光大学人間学部心理教育学科・辻直人教授、日本女子大学文学部英文学科・白井洋子名誉教授、日本女子大学文学部史学科・差波亜紀子教授のご講演に大きな示唆を得た。ここに心より感謝申し上げます。

第1章 成瀬仁蔵の平和思想 ——キリスト教主義「人格」教育から帰一思想へ——

Jinzo Naruse's "Concordia": Seeking the Path to World Peace

内山加奈枝
UCHIYAMA Kanae

1. はじめに

日本女子大学の第6代学長を務めた上代タノは、1975（昭和50）年6月23日、成瀬仁蔵生誕記念日の挨拶にて次のように述べている。

先生の晩年近く、第一次世界大戦が終わりまして、十一月十七日、この学校の庭で「休戦アームステス」のパレードがあり、成瀬先生は、旗を持って先頭に立って歩かれました。私も先生の後ろに従って、歩きましたが、あの時の先生のお姿、喜びようは、忘れられません。

第一次世界大戦が終わったことを、ただ喜ばれたのではなくて、これから日本が、世界が、大きく進展してゆくという、非常に大きな希望に満たされておいでになったのです。国際連盟がまだ結成されていない時です。先生はお亡くなりになる前に、国際連盟ができることを御存知であったかどうか私は記憶しておりません。が、とにかく先生の頭の中には、世界憲法というようなものをこしらえる構想さえあり、その構想を私ども書いてもらいました。まだそのお声が耳に残っています。いつも先生の頭の中では個人、日本、世界、この三つが一つであったのです¹⁾。(傍点は筆者)

成瀬は国際連盟が史上初の国際平和機構として発足した1920年の前年に亡くなった。成瀬にとって「個人」、「日本」、「世界」がひとつであったという発言は、言いかえれば、成瀬の教育が、「個人の信仰（信念）」をいかにして育み、より広い社会、日本のみならず世界にまで還元するかの取り組みであったことを示唆する。

上代がこのあと続けて述べるのは、成瀬が国際的に展開した帰一運動のことである。成瀬が中心となって1912（明治45）年に設立した帰一協会は、国内外の各界の有力者（教育者、政治家、実業家、官僚、思想家）、キリスト教に限らず様々な宗教を持つ幅広い会員で構成されており、宗派、階級、人種による制限を超えた社会的連帯を目指した国際的な交流会であった。上代が先の引用で触れた「世界憲法」、および「帰一運動」が最終的に目指したのは世界平和であったといえよう。

日本女子大学校が開校されて約10年、日露戦争のあとの反動の時代には入学志願者は激減し、1912年から5年間、文学部（国文学部）の学生募集を停止している。だが、英文文学部の歴史が中断されることは一度もなかった²⁾。このことを鑑みても、成瀬の考える教育効果が日本国内だけに完結するものではなかったことが推察できる。

上代は1951年に WILPF の日本支部長に就任、日本が1956年によりやうく国際連合に加盟した際にはそれを多いに祝し、WILPF もまた世界平和に尽力する抱負を述べている。こうした自国中心に偏ることのたない民主主義に期待する考えは、上代が成瀬同様に大変尊敬していたジェーン・アダ

ムズ (Jane Addams, 1860-1935) の視座にもみてとれる。第一世界大戦にアメリカが参戦することを断固反対したアダムズは、愛国心がないと批判されることもあったが、上代はアダムズが「愛国者」でなく、なによりも先に「ヒューマニスト」であった姿勢をたたえている³⁾。

世界平和への希求を、教育現場を超えて世論に訴え続けた上代タノの実行力、根気強さ、グローバルな活動、教育における英語力の重視、私有財産の共有、学生への強い愛情、こうした特質はすべて恩師成瀬仁蔵にみとめることができる⁴⁾。上代はまさに、成瀬が一生を捧げた女子教育の結晶ともいえる逸材であるが、成瀬の教育理念のなかに改めて平和思想をみとめるのが本章の目的である。成瀬仁蔵の女子教育思想は明治期の世論に先行するものであったが、国内外の思想や歴史文化の受容から結実したものでもある。

日本女子大学校の三大綱領「信念徹底」、「自発創生」、「共同奉仕」のルーツは、成瀬のキリスト教信仰と帰一思想にあったという考えのもと、本章では主に、日本における同時代のキリスト教主義教育が抱えた「独立自給主義」(独立自給主義)の問題を経て、成瀬の平和思想がいかに形成されたかを考察する。その際、キリスト教主義教育から帰一思想への道程を同じくした同時代の教育者、江原素六(1842-1922)との比較を取り入れたい。

2. 「独立自給」をめぐる困難と教育における「自発主義」

成瀬仁蔵は、1858(安政5)年、長州藩吉敷(現・山口県山口市吉敷)に毛利家藩士の長男として誕生した。曾祖父、祖父、父も揃って教育者という家柄であり、山口県教員養成所に学び、同県室津小学校訓導になったのはごく自然に思われる。だが知識の注入主義を好まず、「自学自動」を教育の理念として掲げた。この教育方針は現代教育の視座をもってして、ますますその重要性が理解できる。

2012(平成24)年、文部科学省の中央教育審議会では、大学教育における「能動的学修(アクティブ・ラーニング)」⁵⁾がはじめて提議され、学生が主体的に問題を見つけ、課題を解決していく教育への転換が要請された。その2年後の中央教育審議会では、初等中等教育の分野にも「アクティブ・ラーニング」の拡張が目指された。少子化とグローバル化が進む現代日本において求められる人的資質は、知識を活用し、自分の言葉で表現し、問題を主体的に解決できる能力であるといえるだろう。大勢に教育を与える現場では、問題を提示し、対話によって解決する方法よりも知識を与えるほうが容易であることはいままでのない。

では、今から1世紀以上前に「アクティブ・ラーニング」を目指した教育観に、成瀬のキリスト教信仰と伝道はどのような影響を与えたのだろうか。そして、学生の主体的学びを促した、成瀬の教育実践を可能にした素地はどのような性質であったのか。明治期のキリスト教主義教育の運営は、国策との兼ねあいが難しかっただけでなく、経済的にも厳しいものであったが、成瀬の信仰と伝道の体験は、その教育理念と密接な関係があるように思われる。

成瀬は1877(明治10)年19歳の時、米国留学から帰国して伝道をはじめてまもない、同郷で旧知の仲であった澤山保羅(1852-1887)により受洗した。澤山は成瀬の人生にもっとも影響を与えた恩師であり、日本最初の独立自給協会である浪花教会に初代牧師として就任した人である。彼は1878(明治11)年、梅本町教会と浪花教会を母体に梅花女学校を創立する。

1879(明治12)年に公布された教育令では、男女の性別教育が明確化される。女子には小学校就学が奨励された時代にあって、梅花女学校は大阪ではじめて女子に中等教育を与える学校であった。同時に、すでに開校していた神戸女学院や同志社女学校が、外国からの宣教師団体(ミッシヨ

ン)から援助を受けて運営されたのとは異なり、最初から「独立自給」を目指して建学された。新時代の師範学校卒業資格を持つ成瀬は、学校創設者のなかでは最年少でありながら専任教師に望まれた。名目上は校長ではなかったが、卒業生の山岡はる子によれば、「校長の役も小使の用も凡て一身に引受けられ」、校内唯一の男性教員として、寄宿舎の力仕事も請け負ったとある⁶⁾。

澤山のキリスト教者としての特質のなかには、成瀬が受容したと思われる点が実に多い。「女性を男性と対等の人格的主体と考えたこと」、「罪人としての自覚」、「生活上での善行の実行」、さらに「教会独立自給論」などである⁷⁾。成瀬は澤山から信仰だけでなく、女子教育への関心を同時に受け継いでいるが、その信仰と教育は別々のものではなく、特に、自らを罪人ととらえる視点に必要となる超越的な存在への信仰と「独立自給主義」は、成瀬の教育と平和思想に密接に繋がると思われる。

1881(明治14)年、大阪で開催された在日宣教師会議で行った演説のなかで、澤山は「独立自給」の根拠として、キリストが弟子たちを宣教に送り出した際にも金銭的支援はしなかったこと、弟子パウロ(パウロ)も教会を創設するにあたり、先輩教会の援助を受けなかったことなどをあげ、教会運営を信徒たち自らの献金で賄うことで信仰心が高められ、伝道活動への熱意も保つことができると説いている⁸⁾。「独立自給主義」においては、いったん外国人宣教師による基盤が伝道地で築かれたあとは、日本人牧師による伝道と日本人信徒による教会自治を旨とした。成瀬は梅花女学校の財政難を乗り越えるため、先祖代々の土地を売るまでして経営に尽力したが、澤山から受け継いだ「独立自給」の原則に従うがゆえに、同校をわずか3年ほどで辞職した⁹⁾。

日本にキリスト教系女学校が多数設立されるのは1870年代から1890年代にかけてであるが、国策の変更はキリスト教主義学校の設立や運営に影響を与えた。成瀬がキリスト教徒を育成する女子教育に乗り出した1878(明治11)年ごろには、自由民権運動が高揚し、キリスト教者の支持を集めた。1882(明治15)年には鹿鳴館をシンボルとした西欧化政策が開始され、政府高官が外国人宣教師や教会関係者を招くことも盛んであった。

だが同時に、儒教的封建思想からの風当たりは強く、国内におけるキリスト教主義教育の運営は困難を伴った。欧化主義は冷めるのも早く、文部省の教育方針が制定された「学校令」が1886(明治19)年に公布されると、国粋主義が強められていく。富国強兵を計る国家の意図により、小・中学校の教科書が検定となり、小学校での英語教育は廃止、国語教育が重要視されるようになった。女子教育論にも日本独自の主張が生まれ、欧米輸入教育へ批判が向けられ、当時、女子中等教育の主流にあったキリスト教系の女子学校にも風あたりは強くなった¹⁰⁾。

欧化主義が台頭した時には、上流社会での英語教育熱が高まり、英語圏出身の宣教師による英語教育を提供したプロテスタント系の学校は一時生徒を集めた。だが、「独立自給主義」をとらないミッション・スクールにおいても学校運営が苦戦を強いられたことに変わりはない。1889(明治22)年に発布された日本最初の憲法(大日本帝国憲法)では信教の自由を認める条文が含まれるも、1884年にカナダ・メソジスト教会によって設立された東洋英和学校と東洋英和女学校の最盛期はわずか1886年から87年の短期間であり、生徒数の急激な上昇と下降がみられた¹¹⁾。

伝道会社は東洋英和の設立にあたり、生徒に福音に触れさせることで回心に導き、同時に家族や友人にその教えを伝えさせることを目的としたが、設立の許可を得るためには外国人宣教師の原案はほぼ消され、聖書研究などキリスト教主義を前面にだすのは厳しい、「曖昧さ」を常に抱えたプログラムでもあった¹²⁾。

成瀬は梅花女子学校を離れたあと、欧化主義から国粋主義に流れが大きく変化するなかで、1883

年からは大和郡山で、1886年からは新潟で伝道・教育活動を開始する。古来より仏教が盛んな奈良という地にあっては、教会設立時から近隣住民による反対運動が生じ、石を投げられる、夜道を襲われるという迫害を受けた¹³⁾。新潟の人々もまた、キリスト教への嫌悪や女子教育への偏見を示し、成瀬はそうした状況を説明するにあたり、教育を受ける夢かなわず自死を遂げたり、キリスト者になったことで親に迫害を受けた女子生徒の例をあげている¹⁴⁾。そうした困難にあっても、新潟では2つのキリスト教主義学校の設立に成功した。説教講話では咯血するほど咽頭を痛め、全身全霊で打ちこんだ。成瀬は「熱心から迸り出る精神力を以て人を感動させた」という¹⁵⁾。

だが、キリスト教と国体という、異なる文化間の軋轢は、成瀬が属す教会や学校の共同体内部にまで深く根をはるものであった。アメリカン・ボードが成瀬に託した新潟での伝道においては、外部からの圧力以上に内部の不和に苦しめられた。成瀬は組合教会系（会衆派）の新潟第一基督教教会の初代牧師となるが、新潟で調停することを期待されたのは、「自給主義」をめぐる同じコミュニティの信者内で生じた対立と、それがもとになって生じた教派間（組合教会系と一致教会系）の主導権争いである。

そもそもなぜ信徒間で対立や分裂が生じたかという、伝道する側の教会運営方針の違いが信徒のコミュニティに反映されたからである。ここで少し、成瀬が新潟伝道を開始する以前と以降に、伝道側の方針がどのように変わったのかについてまとめたい¹⁶⁾。プロテスタントの宣教師がまだ不在の新潟で最初の本格的な伝道を行ったのは、エディンバラ医療宣教会から派遣された医師 T. A. パーム（Theobald Adrian Palm, 1848-1929）である。彼は医療を施しながら、超教派的で寛容な伝道活動をおこなっていた。

パームは約8年間新潟で医療と伝道に従事したが、日本を去りスコットランドに帰国する際は、所属ミッションは異なるが旧知の仲であったアメリカン・ボード所属の J. C. ベリーに新潟での伝道の引継ぎを願い出た。これを受けて、関西を拠点としていたアメリカン・ボードが新潟伝道に乗り出す。アメリカン・ボードは、各教会が独立し、そこに属する会衆（教会員）が役員や牧師の選定、礼拝方式などの教会運営を自立的に行う会衆主義を運営方針とし、「独立自給」を伝道の原則としていた。新たに作った北日本ミッションでは、特にこの「自給主義」が顕著であり、新潟に送り込まれた R. H. デイヴィスや D. スカッターは、この方針の厳守に勤めた¹⁷⁾。病に伏した澤山に説得され、日本人牧師として新潟に派遣された成瀬もその立場をとり、ピューリタンの規律正しい生活を目指した。

だが、パームが新潟に残した信徒のうちには、病院を運営していたパームの経済力に依存する「にわか信者」や「不純な動機をもつ求道者」もあった¹⁸⁾。パームも伝道生活の後半には、信者の独立心を養う必要性を痛感していたが、彼の帰国後、教会運営に伝道側の援助を期待する信徒たちと「自治」を目指すグループの間に不和が生じたのは当然であろう。パームが形成した信徒集団のなかでも、経済的依存が強い者たちは長老派の新潟進出を期し、成瀬が牧師に就任した2ヶ月後には、一致教会系（長老派）の新潟一致教会が設立され、成瀬は信徒間の分裂を防ぐことはできなかった。

さらに新潟時代に成瀬を待ち受けていた困難は、教会運営だけでなく学校運営でも同様であった。成瀬は新潟に赴いてすぐ、西欧文明がキリスト教を土台に発展したという実跡を根拠とし、私立新潟英学校の設立者、阿部鉄次郎に、北越の地にキリスト教主義学校の必要性を説いた。地元の批判にあいながらも、1887（明治20）年10月、新潟英学校は阿部の寄付のもと、キリスト教主義の男子校「北越学館」として再出発した。成瀬は同校の設立と経営にかかわるが、ここでは教頭に迎

えられた内村鑑三が学校から追放される事件が起きている。内村はアメリカ留学を中断し帰国したばかりであったが、職が定まらないなか、W. S. クラークと共に学んだという縁から、同校の影の校長、新島襄（1843-1890）の斡旋を受けることとなった¹⁹⁾。

内村は自分への反論の中心にいた成瀬をのちまで恨んだが、ふたりの対立を招いたのは、大阪時代の成瀬を悩ませた「独立自給」の解釈である。北越学館はキリスト教主義を徳育を基本として、外国伝道会社の援助を受けずに設立されたが、仏教が強い新潟では信徒以外からの寄付も受けた。生徒の愛国心を育むことを重視した内村は、これに賛同したが、英語の授業は外国人宣教師によって「無給」で提供されている実情が、内村の考える「ミッションの影響を受けない独立主義」にはそぐわなかった。無償で英語教育を受けることは、ミッションから間接的に援助を受けていることと同義であると解釈したのだ。

こうして学館規約の改定を求める内村は、「仮教頭」という奇妙な肩書を付し、自身の教育方針を示す意見書を提出する²⁰⁾。主な主張は、聖書研究や礼拝を生徒に強制せず、仏教や儒教も生徒の徳育にとりいれること、また外国人宣教師による無償の労働を批判するものであった。しかし、日本人にあわせた内村のキリスト教教育は理解されがたく、有給の英語教師を雇うことは学校の財政上無理であった。この時は、外国人宣教師を追放することなく、また内村をそれ以上追い詰めることもしないという結果に終わった²¹⁾。内村は学生を扇動し、学校は分裂の危機に瀕したが、一貫して方針を変えることのなかった成瀬の前に、自ら辞職した。

北越学館事件は、キリスト教主義の立場にたつ教育者の信条が実に多様であり、「独立主義」といっても、どこまでを「内」とし、どこからを「外」とするのか解釈の分かれることを示している。成瀬がのちに帰一思想と、それに基づく教育に向かうことを考えれば、日本の精神風土を活用する内村のキリスト教教育の影響を受けたと考えることは自然である。大森秀子は、内村の「無教会主義」、すなわち「制度的教会によらない内村の信仰観は、成瀬の宗教意識に潜在的に影響を及ぼしたと思われる」と述べる²²⁾。さらに、内村の後任に迎えた松村介石の、陽明学を取り入れた精神教育や新神学の知識が、オーソドックスな神学に固執していた成瀬の眼を開き、アメリカ留学の契機になったことを示唆している²³⁾。

事実、1885（明治18）年以来、キリスト教の機関紙『福音新報』を介して成瀬と親しくなっていた松村介石は、洋行後の成瀬の信仰の質の変化を感じ取り、この時の印象とのちに展開される帰一思想を結びつけている。松村は、成瀬が留学する最初の目的であった宗教問題がどうなったのかを本人に問い、成瀬の返答がいかなるものであったか詳しい事情は語らないものの、「成瀬といふ男は實に正直の男だから、外國へ行つて、基督教の實狀を見るとよくよくだめだと見切つてしまつたと見え」と回想している²⁴⁾（傍点は筆者）。

また、松村が率直に「君、信仰はどうした」と成瀬に尋ねると、それに対する明言はなく、逆に松村が祈祷を行っているか、聞き返したという。

私はその時無論祈禱はやめては居ないと答へた。さうして形式に墮した宗教は排斥するが「上天の恵み」「神明の加護」「天祐」「目に見えぬ神」を信ずる以上祈禱は宗教の根本だと思ふ。と答へたので、成瀬君もその時は黙つて聞いて居たが、後に彼が「歸一協會」の發議をして、それを何れの宗教にも拘泥せぬところの一つの宗教團體を起さうと思ひ立つたことを、私も嬉しく思つて「これだこれだ」といつて賛成したものであつた²⁵⁾。

松村の回想は、成瀬の信仰の質が留学先での経験を経て変化し、神への個人的信仰がより大きな精神運動（帰一運動）に発展したことを示唆している。松村がここで曖昧にまとめてしまう、成瀬が「基督教の實状を見るとよくよくだめだと見切ってしまった」という背景にあった実情もまさに、個人の信仰がどのように社会に還元されるのかという成瀬の問いに旧来のキリスト教では対応できないという問題であったといえる。

成瀬が1891（明治24）年に留学したアンドーヴァー神学校は、当時のアメリカ宗教界のなかでも先端的な神学の拠点であったが、そこでも、かつて彼を苦しめた北越学館事件と同種の対立が起きていた。成瀬が入学したときは、正統派のドグマ主義と自由神学の間で約10年闘われてきた論争が終わりを迎えるころであったが、リベラリズムに傾向したアンドーヴァー神学校とアメリカン・ボードの確執も知ることになった。保守的なアメリカン・ボードは新神学を学んだ同校の卒業生を宣教師として認めなかったのだ。

こうしたコミュニティ内の分断を体験したことで、聖書を字義通りに解する福音主義的な神学から、教義や宗派にとられずに個人の自由な解釈を認めるリベラルな考え方へと方向転換したのだ²⁶⁾。留学から約20年後を経て、成瀬は当時を振り返り、自分の宗教思想に大きな変革をもたらしたのは、アンドーヴァー大学で学んだ科学、あるいは社会学であったと語っている²⁷⁾（傍点は筆者）。

その実、神学にみられる社会学への志向は、すでに1830年代ごろから米国に登場した²⁸⁾。この風潮には、成瀬に強い影響を与えた思想家のひとりラルフ・ウォルド・エマソン（Ralph Waldo Emerson, 1803-1882）の思想も含まれるだろう。彼が形骸化した礼拝式に反発して、ボストン第2教会を離れたのは1832年のことであった。信仰の徹底を個人に求めるよりも、キリスト教の愛の精神をどのように現実社会に実現するかという「社会学的」な観点への転換、また、宗教の「非科学性」への批判も始まっている²⁹⁾。

北越学館事件のときと同様、成瀬は留学時代、同じ宗派内においても、聖書の解釈や伝道の方法ひとつにおいても考え方が大きく異なることを身をもって体感したに違いない。「内部からも対立を排除できない経験」、あるいは同じコミュニティ内でも個人によって「内部と外部の範囲が変わるという見地」は、のちの帰一思想および平和思想に影響を及ぼしたと考えることができるだろう。

ただし、教育現場における成瀬の変化は、留学前の新潟時代にすでに現れている。1887（明治20）年、北越学館開校の5か月前にも、成瀬はキリスト教主義教育を目的とした新潟女学校を開校したが、信教を問わず広く県内の名士から寄付を募った。生徒の信仰においては、以前よりも寛容に自然に育まれるのを待ったといわれる³⁰⁾。成瀬がのちに、高等女子教育に対する世の批判を乗り越えて女子大学校の設立に漕ぎつけたのは、政財界の有力者の賛同を得て多額の資金援助に成功したことも一因であるが、新潟時代すでに、社会実業を可能にするための現実的な選択がみられる。

ここまで見てきたように、成瀬が伝道者・教育者としての出発点であった梅花女学校時代にこだわった「独立自給」の徹底は、日本で教会やキリスト教主義学校を運営するには難しい問題であった。だが、「独立自給主義」は、学生の資質に求める「自発主義」として保たれたと考えることもできるだろう。成瀬の教育における「自発主義」の尊重は、梅花女子学校時代からみることができる。成瀬が澤山をはじめとし、日本内外から多くを受容したように、伝道も教育も外部から与えられるものである。けれども、いったん他者から得た問題を解釈し続けるのは自分である。

澤山から受容した特質のひとつ、「自らを罪人として自覚する」といったピューリタンの内省体験は、青年期の成瀬の人格形成に寄与したにちがいないが、そうした内面の体験が学生の人格形成に

においても重要であるという確信に繋がったのではないか。続いては、成瀬の宗教観がいかにして人格主義教育と結びつき、帰一思想に発展するかを考察する。

3. 「内面」の育成と「自発主義」——江原素六との共通点

1891（明治24）年、アメリカに留学した翌年の日記に、成瀬は「自発主義」と関連する次の記述を残した。「人心は決して他人より勧められ、或は戒められ、或は忠告され、或は教えられて自を改め徳に進むもの二あらず。其人自身が自ら撰ンデ決心し、即ち自ら練り自ら省ミ自ら改むる心あらざれば決して進まず」³¹⁾。

学生の自発性を重んじる成瀬の教育には、次のような例も伝えられている。成瀬夫婦は寄宿舎のできる以前、地方出身の学生を自宅に預かっていたが、寄宿舎の完成後も本人や保護者の希望によって、5、6人の学生が残っていた。成瀬と共に生活した彼女たちの記憶は『成瀬先生傳』に残されている。

日曜日にうつかり友達同志で雑談などを始めると、先生は二階の書齋から降りて来て、だまつて其の間に坐つてゐる。暫くしてから又だまつたまゝ、自室へかへる。安息日に「そんな俗談をしてはならぬ」とか「静肅にせよ」とか、口で叱つたことはなかつたさうである³²⁾。

言葉で注意することなく、態度に示すことにより学生におのずと気づかせるといった指導は、先にあげた東洋英和学校内部に「普通の中学校」を設立した江原素六の逸話にも残されている。江原もまた成瀬同様、預かった青年たちとともに寝起きし、黙して態度で示したという逸話を残している³³⁾。

ここで、成瀬と同じくキリスト教主義教育から「自主性」を重んじる教育を打ち出した人物として、1893（明治26）年に東洋英和学校の校長に就任した江原素六について触れておきたい。江原も成瀬同様、キリスト教主義学校の教育方針と経営に苦心し、やがて徳育をキリスト教に限定しなくなるといふ道りが成瀬の場合と近似している。成瀬は長州藩の出身、一方の江原は旧幕府軍として鳥羽・伏見の戦いで敗北を喫したという違いこそあれ、ともに武士道や儒教に馴染み、キリスト者となつてからは伝道活動に熱を入れた経歴を持つ。

また、入江寿賀子の調査によれば、明治後期から大正期の女性雑誌、特に女子教育の発展を謳った啓蒙誌への江原の発言は17誌66篇に及び、女性解放運動を支持した³⁴⁾。具体的には、東京婦人矯風会（のちの日本キリスト教婦人矯風会）が行った一夫一婦制の唱道や廃娼運動、婦人参政権獲得のための活動を30年以上に渡り支えた。

江原は成瀬の発案で設立された帰一協会発足時に会員として名を連ね、日本女子大学校の設立に賛同したひとりでもある。1897年3月に帝国ホテルで行われた日本女子大学校第一回創立披露会が行われた際は、成瀬や大隈重信らと共に演説を行っている³⁵⁾。

江原は成瀬よりも16歳年上であるが、成瀬が洗礼を受けた翌年（1878年）に受洗している。郷里沼津から上京し、1890（明治23）年に衆議院選挙に初当選し政界入りしたが、カナダ・メソジスト教会の信者であった江原は、1893（明治26）年東洋英和学校の新校長として迎ええられる³⁶⁾。翌年には、東京府庁の認可を受けぬまま東洋英和内部に「普通部」を設置。1895（明治28）年には東京府庁の認可を受け、「私立尋常中学東洋英和学校」が誕生した。

すでに述べたように、この時期は欧化主義から国粹主義へ移り変わる風潮のなかで、ミッシヨ

ン・スクールは生徒を獲得できずにいた。江原が理事会を散々説得のうえ、「普通の中学」を内部に設置したのは、「各種学校」という地位では望めなかった、徴兵猶予といった特典を獲得し上級校への進学を道を開くことで生徒を獲得するためであった。同年、「麻布尋常中学校」に改称したのも、「東洋英和」の名前が与えるキリスト教系という印象をぬぐい、地元からも生徒を集めるためであった³⁷⁾。

困難は続く。1896（明治29）年に文部大臣が設置した高等教育会議で審議された私立学校令のなかには、「宗教上の教育」を禁ずる項目が含まれていたが、委員のひとりであった江原は文部省を批判した。憲法で保障された信教の自由が、法令によって蹂躪されることへの懸念、そして「私立」学校の教育内容に国が干渉することへの異議申し立てであった。

だが宗教教育の禁止に反対するものは少なく、文部省の原案は採択されている。結局、宗教と教育の分離を求める条文は外交上の理由から私立学校令には含まれなかったが、1899（明治32）年、「訓令第12号」として発布された。キリスト教主義教育を続ければ、「各種学校」の扱いに戻ることになる。それを避けるため、1900（明治33）年、江原は東洋英和と完全に袂を分かち、近くに土地を買い求め、「麻布中学校」を開校する。

独立前、江原は正式なキリスト教主義教育でなくとも宗教的感化力は保たれると主張した。だが、ミッション・スクールにとっては、伝道が行えないのであれば学校教育の意味はない。こうして、江原とミッション側の完全な対立となったうえでの「独立」であり、多額の借金に苦しみながら自立を目指すことになった³⁸⁾。

ただし、これは江原が完全にキリスト教主義教育を不要と考えた結果ではない。麻布中学の開校式には文部大臣も列席したが、江原が演説を要請した、明治学院院長の井深梶之介はここでキリスト教教育の必要を忌憚なく論じた。井深は江原が「キリスト教主義にあらざれば人格的教育は施すことは出来ないと信じていられた」と語っている³⁹⁾。

江原は宗教、特にキリスト教主義教育が社会改良につながると考えたが、その理由は「銘々に固くその義務をつくすことを教え、境遇智力また年齢等に応じて忠実に勤勉なるべき事を教え、放漫自堕落等の事を禁物としておるからである」と述べている⁴⁰⁾。麻布中学開校後は、教育課程でのキリスト教教育は行われないものの、江原は寄宿舎で朝夕の聖書購読を継続した。

江原は政界に身を置きながらも、終生、「私立」にこだわった⁴¹⁾。その背景には、生活苦にあげく多くの旧下級幕臣たちの生活を支えるため、江原がいち早く着手した海運業、製靴業、畜産業などがことごとく、士族や国体の体面のために禁止された経緯があるという⁴²⁾。

国とミッションの板挟みとなった経験は、そのどちらからも距離を保ち、より自立的に青年の人格を育成することの可能性に賭けたからであろう。現在の麻布学園は、学則を持たない自由な校風で知られるが、江原自身は生前、他人の自由と権利を尊重するためには、自らも「独立自尊」の徳に満ちていることが「政治的人格の一大要目である」と述べている⁴³⁾。

同時代のキリスト教主義教育者であった成瀬と江原は、国家による外交・教育方針の転換、仏教や儒教を土台とした国民性、あるいはミッションから求められる制約の中で学校運営を試行錯誤しながら、「自主自立」を第一とする教育方針を持ち、男子同様、女子も自活を目指すことをよしとした。もちろん、アメリカン・ボードの牧師として「独立自給」を遵守しようとした成瀬とカナダ・メソジスト教会で洗礼を受けたあとも、静岡の神道国教化運動の元締めとして神道の講義を続けていた江原とでは、キリスト教への向きあいかたに温度差があるかもしれない。

江原は「文明開化」を看板にしたプロテスタントの合理性を、表層的に受け入れた知識人のひと

りであったという指摘がある⁴⁴⁾。また、江原は生涯で2回受洗したが、最初の入信はキリストの贖罪を信じたわけではなく、江原の管理下にあった沼津中学校の教師であったカナダ・メソジスト教会の宣教師ミーチャム（George Marsden Meacham, 1833-1919）の高潔な「人格」に「賛意を表する意味」にて洗礼を受けたという⁴⁵⁾。

一方、成瀬が語る入信の経緯は、自身が悩んでいた様々な疑問に、澤山が「熱心に、はっきりと、思慮深く」答えてくれたことで新しい世界に目が向けられたとある⁴⁶⁾。前後の文脈から推測すると、成瀬のいう疑問のなかには、幼少期に母の死を体験し、天国があるのか否か、母に再び会えるのかと苦悩した疑問も含まれたであろう。成瀬のいう「宗教生活」はまだ幼いころに生じたが、見落とすことができないのは、成瀬の興味の対象が、キリスト教の与える内面的なものではなかったことだ。成瀬もまた、西欧の科学や哲学が郷里に輸入された13歳ごろ、キリスト教に不信や不安を感じた一方で、西欧が真の宗教を発見したからこそ、科学と哲学の発展した可能性に希望を感じたと語っている⁴⁷⁾。

片桐芳雄は、成瀬仁蔵が辿った道が同時代の日本の知識人、あるいは世界思想が歩んだひとつの典型的な道であることを示唆し、内村鑑三はもとより、高嶺秀夫、新島襄、初代文部大臣森有礼らはみな、欧米留学の際、自然科学を学んだことを重視する。

この時代、自然科学は工業と結びついて産業構造を変え、社会構造を大きく変える強力な武器となった。時代の先端に強く憧れた、日本の、有為の青年たちは、自然科学に魅かれ、同時に、彼らの多くがキリスト教と深く関わった⁴⁸⁾。

江原素六は正規の留学はしていないものの、1871（明治4）年、静岡藩の代表としてアメリカの先進技術の視察団に加わり、アメリカの耕作機械を日本に導入するなどの検討を試行している⁴⁹⁾。新渡戸稲造もまた、最初の著作『農業本論』（1898）では、日本の自主的経済発展のために農業開発を重視し、農業、商業、工業の併進を唱えた。

むろん、欧米諸国においても、科学技術と産業が近代国家とともに発展することで生じたのが信仰の問題であった。成瀬の課題であった「キリスト教信仰と科学技術との融合」を考えるうえで重要な近代人としては、「ミスター・アメリカ」と呼ばれたベンジャミン・フランクリン（Benjamin Franklin, 1706-1790）が最も早い好例になるだろう。彼はピューリタニズムが色濃いボストンに生まれ育つも、理神論の立場をとり、実業で成功すると、科学、外交、政治、文学に至るまで多様な分野で才能を開花させ、啓蒙思想や科学技術に傾倒した。

米国での近代化の促進は、国民の信仰離れを招き、18世紀半以降、幾度も信仰復興運動が生じている。成瀬の留学中は、19世紀半から20世紀初頭にかけての第三次覚醒運動の時期にあたるが、無学な説教師にして著名な慈善活動家として知られるドワイト・ライマン・ムーディー（Dwight Lyman Moody, 1837-1899）の生の説教をノースフィールド女子神学校の夏期学校で聴き、いたく感銘を受けている。

フランクリンがフィラデルフィアで実業家として成功し、政治家の道を歩みだしたころは、1730・40年代に生じた第一次覚醒運動が生じた時期と重なる。1739年には、ジョナサン・エドワーズと共にリヴァイバル運動の中心人物であった、ジョージ・ホイットフィールド（George Whitefield, 1714-1770）がフィラデルフィアに巡回してきたが、フランクリンは、彼の野外説教を聴いて感化を受けた体験を語っている。ホイットフィールドへの献金が正しいものであるか問いな

がら、最終的には彼の清廉な性格を確信している⁵⁰⁾。

興味深いのは、成瀬の宗教観の変化の過程が、フランクリンに追随するようにみえることだ。フランクリンは自伝のなかで、神への感謝と信仰心を語る一方、自分が所属する長老教会の牧師の説教が、神学上の論争や、その宗派独特の教義の説明に終始していることを批判している。「私たちが善良な市民にするよりは、むしろ長老教会派に仕込むことを目的としているらしく思えた」⁵¹⁾。成瀬が米国留学を契機に旧神学から離れた際も、神学の解釈をめぐる対立に権威主義的な不毛を見出してはいたはずだ。時代も国も隔たる両者であるが、社会発展に尽くすことと、教会主導の規律を守ることの両立は難しいことであったはずだ。

ただし、信仰と資本主義的發展が相いれないわけではない。教会に幻滅したフランクリンは、もはや公式の集会に出席することはなくなったが、道徳的完成に近づくため、自ら宗教的信条を作り、それが有名な「十三の徳目」となった。勤勉こそ富と名声をもたらすという彼の考えは、子供時代に敬虔な父から教えられた、ソロモンの教え（箴言）に由来するものである⁵²⁾。それらの徳目を実行できたか日々日記に記し、人格に磨きをかけたのは、ピューリタンの特質であると考えられる。フランクリンは独学で避雷針やフランクリンストーヴなどを発明したが、特許を求めず社会に還元し、慈善事業に熱心であった。

勤勉に働くことで得られた利潤を社会事業に還元したフランクリンにあっては、ピューリタンの自己内省の習慣と科学技術や産業の發展が接続する。マックス・ヴェーバーが『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』（1904）で論じたのは、まさにプロテスタントの禁欲的勤勉に基づく労働が資本主義の發展を導いたということであった。

成瀬が19世紀末の留学時代に強めた、信仰によって形成された人格を生産活動に還元するという意識は、フランクリンの時代にまで遡り、近代に求められる宗教の役割に、「人格主義」という、近代的価値観が見いだされることがわかる。

よって、成瀬にとっての「祈り」がフランクリンの徳目の実践と同じ目的を持っていたことは不思議ではない。成瀬もフランクリン同様、日々の目標の点検を重視した。成瀬にとって、祈りの実施が自身の問題のひとつであったことは、先の松村介石との対話からうかがえるが、祈りの目的はやがて「人格形成」となる。

祈りは吾々の宇宙に対する態度であつて、自己を捧ぐる事を謂ふのである。又自分が目的とする事を実現せんとするに当り十分にわが頭脳を鍛錬し反覆し、其の意志が自然に言葉となって溢れ出て、又行となって現れる様に自ら自己に命令し、暗示するの、も吾々の云ふ一種の祈りである⁵³⁾。（傍点は筆者）

さらには、「祈りの実行は自己実現である」とも発言している⁵⁴⁾。では、祈りの内容とは何か。

其の日其の日に行はうと思うこと、方針とすべきこと、希望、理想とすべきことを、書物から抜き取つて考へてもいい。とにかくその日その日の目標とすべき主想を定め、それをくり返して祈念して、その一日の心の糧とし、力としなければならぬ⁵⁵⁾。

ここまでくれば、成瀬のいう「祈り」は、フランクリンの「十三の徳目」と目的が同じであることがわかるだろう。

先の引用では、成瀬の祈りの向かう先は「宇宙」であった。成瀬は「宇宙」と「神」、「普遍」を同義に使用する。また、「我々人間の個人は、宇宙の本質を蔵する種子である」と述べている⁵⁶⁾。自然の一部を構成する各々の個人のなかに普遍性を見出す人間観は、先にあげたエマソンからの影響であろう。

成瀬は留学中、キリストを神ではなく人間として捉えるユニテリアニズムの影響を受け、晩年の1915年からはエマソン研究に集中した。その成果は、1917年夏の軽井沢三泉寮での連続講演の内容に反映されている。以下に引用した成瀬の講演には、自然も人間精神も、神（普遍）の反映であり、それを「直観」によって捉えようとしたエマソンの影響をみとめることができる。

個人々々の天才も時代の偉人も、此の小天地も、又世界的人類も、小さき吾も、小さき團體も、否千差萬別の如く見ゆる萬有そのものも亦、同一原因を以つて古今東西に通じた一の大問題を持つて居るといふその根底となるべきものは皆此の人心に歸一を要求するといふ。實に此の必然的靈法（Mental Law）即ち人間の心の底深く内在して居るそれである⁵⁷⁾。（傍点は筆者）

この箇所からは、ひとりひとりの個人なかに、普遍的な神聖が宿るというエマソンの一元論的な考えを読み取ることができるが、この Mental Law が要求する「至上人格」（supreme person）を、やはり直観にて求めることが、成瀬にとっての信仰生活となったのだ⁵⁸⁾。北越学館時代以来、成瀬を支え続けた麻生正蔵（第2代学長）は、「自発創生」、「信念徹底」、「共同奉仕」を「成瀬校長の生ける人格の流露である」⁵⁹⁾と述べたが、「人格主義」は、成瀬自らの生きた宗教生活であり、そこから教育理念が生まれ、帰一思想にまで広がったといえる。

「人格」の概念がキリスト教信仰に密接に関係しつつ、やがて特定の宗教を超えた意味で用いられるようになったことは、新渡戸稲造にも通じる。谷口稔によれば、「パーソナリティ」という言葉の訳語がまだ「人格」に定まる以前、福沢諭吉は「気品」、新島謙は「品行」という言葉を用いているが、1890年代前半にカントの person の訳語に「人格」をあてることで哲学的意味を持たせた中島力蔵の流れで personality を理解したのが新渡戸であったという⁶⁰⁾。

さらに谷口は、新渡戸がキリスト者として、「父と子と精霊の三位一体（スリー・パーソンズ・イン・ワン）」の文脈から「パーソン」をとらえ、神とキリストの縦の関係と同時に、人間同士が横の関係を結ぶ「社交性」に重きを置いた思想家とみなす⁶¹⁾。成瀬もまた、キリストを優れた人間と捉えることで、至上の神との関係だけでなく、他者との横の繋がりを重視した。日本女子大学の同窓会、かつ社会実業部でもある桜楓会に期待されたのは、まさに連帯の力であり、成瀬はこれを「社会的人格」と呼んだ。その人格は孤立した概念ではなく、縦と横の繋がりのなかに生じる。

新渡戸は、「人格」という概念を持たなかった日本人にそれを理解させるにあたり、「神」ではなく「天」という言葉を用いたが、仏教でも神道でも「とにかく人間を超えた存在に対して心の交流をすることを勧めた」⁶²⁾。新渡戸のいう「天」との交流や、成瀬の祈りが向かう「宇宙」は、キリスト教信仰から派生しつつも、そののみに限って理解することはできない。

新渡戸が『武士道』（1899）を記し、江原が「論語」と「聖書」を並行して愛読したように、成瀬は晩年の1912年、キリスト教に入信後も、一度信じた仏教、神道、儒教が「今日も尚私の信仰の土壌となつて居る」と語った⁶³⁾。日本女子大学校と帰一協会双方の設立に寄与し、第3代学長となった洪沢栄一もまた、数回のアメリカ滞在を通して、日本の精神と思われていた孝・悌・忠・信といった特質が、思いがけず米国の家庭にもみられることを書き残しており、キリスト教精神のな

かに日本の儒教と共通する普遍性を見出している⁶⁴⁾。

4. おわりに

影山による、成瀬の「帰一」(Concordia)の解釈では、「各宗教が形式的に集合して同居していることだけではなく、全ての人間に共通する内発的宗教心の本質的な働きに着眼、そこに統一点を見出している」(傍点は筆者)⁶⁵⁾。ここでいう「内発的宗教心」とは、いいかえれば「信仰」であり、「信念」である。

全3巻からなる『成瀬仁蔵著作集』は、第1巻が1881(明治14)年から1900(明治33)年、第2巻が1901(明治34)年から1912(明治45)年、3巻が1912(明治45)年から1919(大正8)年まで、時代順に構成されているが、第1巻では現れなかった「人格」という言葉は、第2巻以降、頻繁に使用されるようになり、同時に、「真理」、「理想」、「進歩」といった言葉も頻出している。さらに、第2巻では登場していない「信念」が、第3巻になると「信仰」以上に使用される⁶⁶⁾。つまり、成瀬が「信念」という言葉を使うようになったのは、「帰一協会」が設立された1912(明治45)年以降であり、「信仰」と併用して使われるようになったことがわかる。

成瀬の倫理の授業では、「信仰」と「信念」はひとつのものであったが、それは特定の信条を信じるのではなく、科学や哲学の知識を得たり、他者と交わることで絶えず変化して進歩するものになる。ゆえに日々の祈りにおいて、理想を設定し直す必要が出てくる。こうした信念生活によって生み出される人格や天職は、個人のものであるとともに社会的なものでもある。

学生の「自発心(信念)」を育む一方で大学や帰一協会設立の協力を得るには、卓上の思想ではなく、成瀬の「人格」という実証なくしてはなしえなかったはずである。教育と宗教に共通するのは、「感化力」である。帰一思想が支持者を多く得たのも、平和を希求する普遍的ヒューマニズムが成瀬その人の信念(人格)によって体现されていたからであろう⁶⁷⁾。

註

- 1) 日本女子大学英文学科内上代たの文集編集委員会編『女性教育者の先達——上代たの文集』1984年、52頁。
- 2) 新井明「成瀬仁蔵と英文学科の創設」『日本女子大学文学部英文学科百周年記念誌』日本女子大学文学部英文学科百周年記念誌編集委員会、2004年、10頁。
- 3) 上代、前掲書、137頁。
- 4) 94歳であった上代が後輩の青木生子(第9代学長)に遺したことばは、成瀬同様に「学生を真に愛すること」であったという。青木生子『近代史を拓いた女性たち』(講談社、1990年)、91頁。
- 5) 「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～(答申)」平成24年8月28日、9頁。
https://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2012/10/04/1325048_1.pdf (参照2024-06-15)。
active learning という用語と概念は、主に1980・90年代の米国の高等教育改革で発達した。現在の文科省では、「主体的・対話的で深い学び」という表現も採用されている。
- 6) 成瀬先生追懐録編集委員会(日本女子大学校第二十五回生)『成瀬先生追懐録』(櫻楓曾出版部、1928年)、85頁。
- 7) 影山礼子『成瀬仁蔵の教育思想：成瀬的プラグマティズムと日本女子大学校における教育』(風間書房、1994年)、24頁。
- 8) 成瀬仁蔵『澤山保羅：現代日本のポウロ』新井明訳、(日本女子大学、2001年)、144-156頁。

- 9) 澤山自身は「独立自給主義」を宣教師ホレース・レヴィット (Horace Hall Leavitt, 1846-1920) から受け継ぎ、彼が設立した浪花教会は、アメリカン・ボード (American Board of Commissioners for Foreign Missions) の資金援助を受け入れることを認めなかった。成瀬筆の前掲書 (『澤山保羅』137-138頁) によれば、伝道活動においてアメリカン・ボードの支援金を得ることはむしろ普通であり、澤山の自給論が特に強固であったことがわかる。
- 10) 中寫邦『成瀬仁蔵研究：教育の革新と平和を求めて』(ドメス出版、2015年)、45-46頁。
- 11) 麻布学園百年史編纂委員会『麻布学園の百年 第1巻歴史』(1995年)、27頁。
- 12) 前掲書、29頁。
- 13) 仁科節編『成瀬先生傳』(櫻楓會、1928年)、71頁。
- 14) 『澤山保羅』、前掲書、187-188頁。
- 15) 仁科、前掲書、85-86頁。
- 16) 成瀬をふくむ新潟における伝道活動については、次を参照されたい。本井康博『近代新潟におけるプロテスタント』(日本キリスト教団 新潟教会、2006年)。
- 17) 前掲書、100頁。
- 18) 前掲書、41頁。
- 19) 新島謙、澤山、成瀬はともに、組合教会(会衆派)の牧師であった。2003年に始まる日本女子大学と同志社女子大学間の交換留学制度が成立した背景には、新島謙と成瀬の間に交わされた深い交流が復活したものである。本井康博『新島襄の師友たち——キリスト教界における交流——』(思文閣出版、2016)、179-181頁参照。
- 20) 内村鑑三『内村鑑三全集1』(岩波書店、1981年)、171頁。
- 21) 成瀬と内村の対立の経緯は、片桐芳雄「北越学館事件の成瀬仁蔵と内村鑑三——「成瀬意見書」の検討を通して——」に詳しい。『人間研究』第53号、2017年。片桐は、内村の規約の独善的な解釈や、自らの保身のため当時の政治的対立を学校に持ち込んで利用した身勝手さを痛烈に批判している。13頁。
- 22) 大森秀子『成瀬仁蔵の帰一思想と女子高等教育：比較教育文化史的研究』(東信堂、2019年)、37頁。
- 23) 前掲書、39頁。
- 24) 『成瀬先生追懷録』、前掲書、28頁。
- 25) 『成瀬先生追懷録』、前掲書、29頁。
- 26) 大森秀子『多元的宗教教育の成立過程：アメリカ教育と成瀬仁蔵の「帰一」の教育』(東信堂、2009年)、195頁。
- 27) 青木、前掲書、75頁。
- 28) 中寫邦、日本歴史学会『成瀬仁蔵』(吉川弘文館、2002年)、72頁。
- 29) 前掲書、72-73頁。
- 30) 仁科、前掲書、90頁。
- 31) 成瀬仁蔵著作集委員会編『成瀬仁蔵著作集 第1巻』(日本女子大学、1974年)、488頁。
- 32) 仁科、前掲書、91頁。
- 33) 江原先生伝記編集委員会編『江原素六先生伝』(大空社、1996年)、312頁。
- 34) 入江寿賀子「江原素六小考——女子教育、女性解放運動への関わりを中心に——」『史艸』第38号(日本女子大学史学研究会、2000年)、44頁。新渡戸稲造が東京女子大学を創立した際、江原に学長就任を打診した経緯には、江原がキリスト者、かつフェミニストであった背景があると思われる。
- 35) 片桐芳雄『評伝 成瀬仁蔵：女子高等教育から「社会改良」へ』(風間書房、2021年)、343頁。
- 36) 江原が東洋英和学校の校長に就任する前年に同校の幹事となったのは、江原にとって政界に出るには有職である必要性があり、また沼津にて教育者としての実績を持っていたことによる。川又一英『麻布中学と江原素六』(新潮社、2003年)、65頁。
- 37) 『江原素六先生伝』、前掲書、89-90頁。
- 38) 川又、前掲書、107-108頁。
- 39) 加藤史朗『江原素六の生涯』(『麻布文庫』I、2003年)、114-115頁。

- 40) 前掲書、157頁。
- 41) 江原の「私学」へのこだわりは、沼津時代にすでにみられる。明治32年に公布された高等女学校令に対応し、郷里の沼津にも高等女学校を設置することを提案。1901(明治34)年、私立駿東高等女学校(現在の静岡県立沼津西高等学校)の開校を顧問として支えた。同校は実際、駿東郡町村全体の負担によって経営されたにもかかわらず「私立」とされた。
- 42) 川又、前掲書、45-46頁。
- 43) 『江原素六先生伝』、前掲書、95頁。
- 44) 川又、前掲書、53-54頁。
- 45) 『江原素六先生伝』、前掲書、204頁。
- 46) 『澤山保羅』、前掲書、32頁。
- 47) 『澤山保羅』、前掲書、32頁。
- 48) 『評伝 成瀬仁蔵』、前掲書、13頁。
- 49) 川又、前掲書、40頁。
- 50) ベンジャミン・フランクリン『フランクリン自伝』松本慎一・西川正身訳(岩波文庫、1957年)、199頁。
- 51) 前掲書、155頁。
- 52) 前掲書、152頁。
- 53) 成瀬仁蔵『成瀬先生講演集 8巻』、(桜楓出版部、1940年)、105頁。
- 54) 前掲書、106頁。
- 55) 仁科、前掲書、359頁。
- 56) 成瀬仁蔵著作集編集委員会編『成瀬仁蔵著作集 第3巻』、(日本女子大学、1981年)、294頁。
- 57) 『成瀬仁蔵著作集 第3巻』、前掲書、492頁。
- 58) 「至上人格」とは、成瀬が影響を受けた自由神学者ボーデン・パーカー・バウン(Borden Parker Bowne 1847-1910)のsupreme personを成瀬が翻訳したものである。『評伝 成瀬仁蔵』、前掲書、614頁。
- 59) 前掲書、30頁。
- 60) 谷口稔『新渡戸稲造 人格論と社会観』(鳥影社、2019年)、25-28頁。
- 61) 前掲書、30-31頁。
- 62) 前掲書、31頁。
- 63) 前掲書、『成瀬仁蔵著作集 第3巻』、583頁。
- 64) 影山、前掲書、125頁。
- 65) 影山、前掲書、127頁。
- 66) 日本女子大学女子教育研究所、『「成瀬仁蔵著作集」事項索引』(フリオール、1995年)を参照されたい。
- 67) 卒業生の大岡蔦枝は、成瀬に在学中に獲得するよう指導された「泉のようにいつも流れ出る原動力」、すなわち自発心を得るために、最初は「ただただ困るばかり」であったという。確かに、自発性は自然に出てくるものではない。最終的に「先生の人格を信じ、先生の誠に打たれ、とにかく先生に教育されようと決心致して進んだ」と回想している。大岡蔦枝『成瀬仁蔵先生』(三月書房、1966年)、72-74頁。

第2章 上代タノ ——平和への志と欧米女性との交流——

Tano Jodai: The Road to Peace Movement
and Exchange with Western Women

高村 宏子
TAKAMURA Hiroko

1. はじめに

日本女子大学第6代学長の上代タノは、1910年に日本女子大学校英文学部を卒業後、欧米留学を経て、帰国後は母校の教育に携わるとともに、戦前戦後を通じて平和運動に取り組んだ¹⁾。その平和に対するぶれない姿勢が日本女子大学の平和主義の伝統に貢献したことはよく知られている。上代にもっとも影響を与え、平和運動への道を拓いたのはジェーン・アダムズであった²⁾。同時に、上代が欧米滞在中に構築した平和主義者たちとの関係も上代の帰国後の活動に影響を与えた。

帰国後の上代が平和や女性の権利を主張する欧米の女性活動家たちとどのような関係を築こうとしていたのか、本稿では、成瀬記念館所蔵の上代宛て書簡および上代が残した書簡の下書き、あるいは機関紙の記事などから、戦前期の上代の活動を探る³⁾。これらの資料の多くは下書きとして残っているもので、その通り書簡が送られたのか、それとも送られなかったのかなどは定かではない。しかし、上代の平和への決意を汲み取るに十分な内容である。

2. 平和活動への第一歩

欧米で研鑽を積んだ上代は帰国後、平和運動に身を捧げる決心をする。上代が欧米で得た見識とダブリンにおける WILPF（婦人国際平和自由連盟）第5回国際大会に参加した経験とが生かされたことは間違いない。恐らく欧米のどこか WILPF 支部の依頼で執筆したと思われる回顧録的な草稿の一部（英文・タイプ書き）が残されている。ここでも上代は平和への決意を明らかにしている。一部を紹介する（いずれも筆者訳）⁴⁾。

当時シカゴで勉強中だったミセス・ヒロ・オオハシ〔戦後1947年に日本女子大学第5代学長に就任〕が、われわれを代表して1924年にワシントンで開催された WILPF の国際会議に出席し、この時われわれ日本支部が WILPF の会員として正式に認められた。

……私たちは朝鮮と中国の学生の奨学金のために募金活動をしたり、中国とよりよい関係を築くために救援物資を送ったりした。さらにアメリカ人居住者と知り合いになって、日本の事情をわかってもらえるよう努めた。著名な講師による集会を催したり、会報を発行したり、あるいは教育程度の高い女性たちや時間に余裕のある女性たちに平和教育を試みたりした。これらの活動では私が事務を担当した。⁵⁾

1926年、留学中の上代はジェーン・アダムズの推薦でダブリンで開催された WILPF の世界大会

に参加し、アダムズの精力的な行動と平和に対する情熱に感銘を受ける。この経験が後の上代の活動の原動力となったことが明らかにされている。

1927年に帰国後、私は母校の大学英文学部の学部長となり、同時に平和運動も活発に続けた。1931年の満州事変では、鉄道線路がわずかに傷つけられたことが、日本軍に攻撃の口実を与えてしまった。この時、われわれ女性たちは平和を守るため政府に対して最大限の圧力をかけたが、もちろん成功しなかった。われわれは、日本の女性たちが団結して立ち上がり、こうした軍国主義的傾向に反対することを夢みた。しかし、これももちろん失敗した。しかも、日本の女性たちにはまだ参政権がなかったのだ。われわれは、中国の女性たちに許しを乞うメッセージを送った。⁶⁾

さらに、上代が満州事変に心を痛め、学生たちにも国際関係を理解させようと努めていたことを思わせるエピソードがある。『婦人平和協会（WILPF 日本支部）会報』第5号（1931年12月）によれば、上代は協会理事らとともに「文部大臣に面接の機会を得、満州事変に対する善処及学校生徒に国際的関心を持つやう教育方面に於て尽くされ度き旨、婦人の立場より、約30分に亘って会談された。」とある。

上代の平和を求める主張は、『婦人平和協会会報』第7号（1933年1月）でも明らかだ。国際情勢をよく理解し、日本の進むべき道を提案している。「私共の立場より」と題する上代の記事は当時の状況を考えるとかなり進んだ内容で画期的と言える。一部引用する。

今日日本はジュネヴァに於て、満州問題に関し、文字通り懸命の努力を払って居ります。（中略）国際連盟の最初最終の目的は、真の平和の維持と其の確立とであります。武力に依らずして、国際紛争を解決し、消極的勢力の消耗を転じて積極的に世界各国の繁栄を期する為、国際正義に立脚した国際協力を実行しようといふことであります。

3. 大典記念女性文化展覧会

1928年4月、日本女子大学校創立25周年を記念し、同時に昭和天皇の即位を祝う「大典記念女性文化展覧会」（以後、展覧会）が目白キャンパスで大掛かりに催された。10日間にわたる研究発表や展示は各界からも注目された。初日には当時の皇后が記念式典に臨席後、展示を見学、さらに寮舎を見学されたと、『家庭週報』933号（1928年4月20日）に報じられている。また、自由学園から生徒たちが引率されて訪れるなど、他校からも注目された。展覧会は大典記念を掲げてはいたものの、事実上は、女子大学校の教育の成果と将来進むべき道を示す高度な内容であった。このことは、来場者の感想からうかがえる（『家庭週報』933号、936号）。

展示内容は宗教、教育、文学、芸術、科学、法制、経済、社会、平和運動と、かなり広範囲にわたっていた。（『家庭週報』932号、936号）中でも、「国際平和運動」の展示は、女性と平和をテーマとし、上代が欧米で築いた人脈を駆使して集めたと思われる資料を中心とした企画であった。『家庭週報』932号によれば、世界の女性の平和団体一覧、国際平和運動における女性指導者の写真、略歴、著書などの紹介と、盛り沢山の展示が中心であった。世界の女性平和団体は分布図で、国際紛争の平和的処理の試みは統計で示された。また、国際平和への貢献を期待されていた女性たちが国際連盟とどのような関わりがあったかも展示の柱であった。これらの準備には上代の学生たちも

加わっていたことが、上代が資料提供者に送った礼状の文面から察することができる。

展示の目玉は、欧米各国で平和運動や女性参政権運動でそれぞれ活躍している女性たちの写真であった。外国人や外国の事情が現在ほど身近でなかった昭和初期、欧米の女性たちの肖像写真はかなりインパクトがあり、展示を盛り上げたと思われる。これらの写真や資料の多くは、上代が欧米滞在中に築いた人脈、縁故関係を利用して準備され、このことは上代が残した礼状の下書き（英文手書き）に示されている⁷⁾。

『家庭週報』936号によれば、各国の女性平和運動家やフェミニストたちの写真や活動の記録が国別に紹介され、展示を盛り上げた。たとえば、(1) アメリカ（ジェーン・アダムズ、キャリー・チャップマン・キャットなど3名）、(2) チェコスロヴァキア（ミネラ・イローヴァほか7名）、(3) ドイツ（アニタ・オーグスバークなど2名）、(4) オランダ（4名）、(5) スウェーデン（1名）、(6) ノルウェー（ローザ・マイレダーなど2名）、(7) アイルランド（ルイ・ベネット）、(8) イギリス（キャサリン・マーシャルほか9名）、(9) デンマーク（ヘンニ・フォーチャマー）、(10) スイス（ゲートルド・ウォーカー）、(11) オーストリア（1名）など、10カ国以上に及ぶ。その他、アリス・ハミルトン女史、ウィルソン女史、キュリー夫人、クラウディー女史からも展示された。

展覧会終了後、上代はこれらの写真の提供者それぞれに対して丁寧な礼状を出している。その他の主な写真としては、国際連盟事務局の写真（スイス・ジュネーヴ）、婦人国際平和自由連盟第5回総会開催中に各国代表がその国の服装を着用した写真、その他、各国の婦人国際平和自由連盟の総会の写真等の展示があった。ただし、これほど大掛かりな内容が欧米から帰国後1年足らずの上代だけで用意できるはずもなく、上代と同じように欧米で勉強し、交友関係を築いていた先輩たちの力が大きかったことはいうまでもない。

4. 書簡にみる上代の欧米女性活動家との交流

上代が写真等の提供を海外に依頼したり、終了後に提供者に礼状を出したりしたことを示す書簡の下書き（英文手書き）は、上代の交友関係の一端を示していて興味深い。一方、上代がアダムズを介して資料提供などを依頼した例も少なくない。

エミリー・G・ボルチがその例である。1889年にアメリカの名門女子大ブリン・マーを卒業後、母校で教職に就くと同時に、女性参政権、人種平等、幼年労働の規制などに関心を寄せていた。第一次大戦が始まると、1915年にハーグで開催された平和を求める女性国際会議（のちの WILPF）に参加し、第二次大戦後の1946年にはノーベル平和賞を受賞している。1919年からは WILPF の事務局長に就任していた。そのボルチがアダムズに代わって上代に宛てた書簡と、それに対する上代の返事を一部紹介してみよう。（日本語訳は筆者）

エミリー・G・ボルチより上代宛書簡（手書き）

（1928年1月19日付、WILPF アメリカ支部のレターヘッド付き専用箋使用）

親愛なるミス・ジョーダイ

ミス・アダムズがあなたの12月4日付手紙を私に送ってくれました。平和展覧会のための資料について、これまで女性が何をしてきたか、そしてこれから何をしようとしているかということに関してでした。

私はまず、マクミラン出版にミス・アダムズの本を注文することから始めようと思っています

す。『Newer Ideals of Peace』『Women at the Hague』『Peace and Bread in Time of War』です。あなたに直接送ってもらえるよう頼もうと思います。

また、ジュネーヴの国際本部の写真を拡大して送りましょう。

さらに、ワシントンとダブリンで開かれた（WILPF）国際大会の記録のコピーを送ります。あなたはそれを写真に撮って展示するとよいと思います。絵葉書の中には興味深いものもあります。（後略）⁸⁾

上代よりボルチ宛（日付不詳、英文手書き下書き）

親愛なるミス・ボルチ

私どもの展覧会のために多くの素晴らしい助言をいただいた、親切なお手紙には大変感謝しております。送ってくださった有益な資料は大変ありがたかったです。

WILPFの国際本部の写真を引き伸ばしたものは、展覧会の中でもっとも傑出したものになるはずです。送っていただいたミス・アダムズのご著書3冊も、よい状態で届きました。ミセス・ウェイルがとても興味深いポスターを送って下さいました。ミセス・キャットとミセス・ミードの写真です。イギリスからは写真がたくさん届いていますので、あなたの国からももう少し写真が届くことを期待しています。ドロシー・ディーガーもワシントンから資料を送ってくれると思います。私の学生たち（girls）は、この平和グループの展示が成功することを期待し、私たちのためにして下さったことすべてに対して感謝しています。あなたがお示下さったご親切に心より感謝申し上げます。

タノ・ジョーダイ⁹⁾

この書簡によれば、英文学部の学生もこの展示に関わって、貴重な経験をしたことがわかる。

上代の書簡（下書）は、資料などを送ってもらったことに対する礼状で、感謝の言葉が並べられているシンプルなもので、日付も同じものが多いのだが、1通ずつ内容が少しずつ異なっていることが注目される。なかには、ともにダブリンの国際大会に出席し旧知の間柄を思わせる内容もある。ドイツの女性平和運動家ゲルトルート・ゲイル宛の書簡にはダブリンでの思い出が述べられている。

私の親愛なるゲルトルート・ベール

長いことご無沙汰して申し訳ありません。ダブリン、ジュネーヴ、グランドであなたと一緒した楽しい日々をよく思い出しています。私にもっと時間があれば、もっと頻繁にお手紙を差し上げられたことでしょう。昨年3月に帰国して以来、ずっと忙しく、手いっぱい状態で、時のたつことも忘れるほどでした。

あなたの素敵なお写真、ありがとうございます。とても気に入っています。全部お返ししなくてはいいませんか？ できれば、私の東京の研究室に飾っておきたいです。もしも全部返さなければならぬとすれば、どのようにすればよいかご指示ください。

著作もありがとうございます。私たちは現在、その一部を日本語に翻訳して、オリジナルとともに展示するつもりであります。

また、連盟の目標を表わすシンボルを大きな写真にして展示するつもりです。（後略）¹⁰⁾

チェコスロヴァキアのジャーナリストで女性の権利運動で活躍していたミンレーナ・イローヴァ宛礼状（1928年3月29日付）には、旧交を思い出させる表現がみられる。

親愛なるミス・イローヴァ

あなたからの個人的なお手紙に加えてチェコ支部会長とあなたの署名入りの手紙をいただき、大変うれしく思っております。あなたのご親切に送ってくださった写真や書籍、そしてパンフレット類はいずれも良好な状態で届きました。私たちの展覧会のためにチェコから素晴らしい資料を送っていただき、大変幸せです。私たちはチェコの方々とお目にかかる機会が極めて少ないので、展覧会ではチェコに人々の注目が集まることでしょう。

私は、あなたのことを非常によく覚えています。グランドでの幸せな日々が特別な喜びとともによみがえります。私たちが学校の校舎で一緒に写真を撮ったことを覚えていらっしゃるでしょう。あなたは笑っていて、私はそばに立っているアメリカ人の女の子と一緒に洋梨をかじっています。（後略）¹¹⁾

アメリカの平和運動家で1919年の国際女性会議ではアメリカ代表として参加したルーシー・ビドル・ルイス宛のお礼状（1928年3月28日付）では、世界の友人と交流する喜びが感じられる。

私の親愛なるミセス・ルイス

今朝、あなたのお手紙と素敵なお写真を受け取りました。私どもの展覧会のために特別に写真撮影をしてくださったことは、素晴らしいです。とても良いコンディションで届きました。（中略）

世界中いろいろな所にお友達をもつことは素晴らしいことです。展覧会のためにすでにさまざまな貴重な資料をいただいております。展覧会ではそれらを日本の一般の人々に見ていただくのを楽しみにしております。¹²⁾

アメリカの女性参政権運動の指導者として知られ、平和運動の活動家でもあったキャリー・チャプマン・キャット宛ての礼状では、上代が世界情勢に深い関心をもっていることをうかがわせる部分もある。

親愛なるミセス・キャット

私どもの展覧会のためご親切にも写真をお送りくださったことに感謝しつつお手紙を書いております。よいタイミングで届きました。私どもはそれを展示することを楽しみにしております。展覧会は4月20日から10日間くらい行われますので、あなたの写真がお国から到着した非常に貴重な品々とともに展示されることを楽しみにしております。

また、W.I.L. (WILPF) の中国代表ミス・パイとマダム・ドレヴェルが、ケログによる戦争放棄の提案についてのあなたの見解を私たちに伝えてくれました。あなたにこのことをお伝えしておきたいです。このことについて私どもはもっと知りたいと思っておりますので、毎年、情報を可能な限りいただけると有難いです。ミス・パイとマダム・ドレヴェルがそちらに滞在中はそうしていただくようお願いしてあります。（後略）¹³⁾

5. おわりに

このように、上代が女性の権利運動や平和運動の先頭に立って活躍していた欧米の女性たちと親しく交流したことは、日本における平和運動を推進するうえで重要であった。しかも当時の日本人女性が外国人と意見を交わす機会が非常に限られていた事情を考えると、こうした機会が上代の将来の平和活動や国際的人脈の構築に役立ったことは間違いない。第二次大戦後、上代は WILPF 日本支部会長として、世界平和アピール七人委員会の有力メンバーとして、また大学学長として、終生、教育と平和活動に捧げることになる。

最後に、資料提供と資料の写真撮影で特にお世話になった日本女子大学成瀬記念館学芸員の是恒果琳氏に心からお礼を申し上げたい。

註

- 1) 上代の欧米留学については、高村宏子「上代タノ：若き日の欧米滞在経験と平和運動への道」『日本女子大学総合研究所紀要24』（令和4年2月）89-97を参照。
- 2) 上代とジェーン・アダムズとの出会いとその交流については、高村宏子「ジェーン・アダムズと上代タノ」『総合研究所第25回研究発表会報告』（電子版）10-12を参照。
- 3) 上代宛て書簡および上代の書簡下書き（英文手書き）は成瀬記念館所蔵。
- 4) 成瀬記念館所蔵。年月日不詳。
- 5) 同上。
- 6) 上代の書簡下書きは、いずれも成瀬記念館所蔵。
- 7) 同上。
- 8) 同上。
- 9) 同上。
- 10) 同上。
- 11) 同上。
- 12) 同上。
- 13) 同上。

第3章 婦人平和協会の設立と女性たちに及ぼした影響

The Establishment of the Women's Peace Association and Women in Japan: 1900-1925

増子 富美
MASUKO Fumi

1. はじめに

第1次世界大戦中の1915年、世界から平和を希求する女性たちがオランダ・ハーグに集まり、1915年4月28日～5月1日の日程で世界平和を議論する会議 国際女性会議を開催した。この会議には、イギリス、アメリカ、オランダ等12ヶ国の欧米諸国から各国代表2名を含む1136名が参加し、議長にジェーン・アダムスを選出し、世界平和についての議論を行い、International Committee of Women for Permanent Peace（永久平和を求める国際女性委員会）¹⁾を結成した。会議後、アジアからの参加がないことに気づき、日本に参加を促す書簡が送られ、成瀬仁蔵が受け取っている。この呼びかけをきっかけとして、日本で初めての平和団体、婦人平和協会の発足につながるのである。日本女子大学草創期における学生及び卒業生に影響を与えたと考えられる世界で初めての平和団体 婦人国際平和自由連盟 Women's International League for Peace and Freedom (WILPF) 及び日本における婦人平和協会の設立の過程を、家庭週報、婦人平和協会会報、婦人と平和、成瀬記念館所蔵資料、デジタル版「渋沢栄一伝記資料」から考察し、女性の考えや行動に及ぼした影響について検討した。

2. クリスタル・マクミランからの手紙

前述の永久平和を求める国際女性委員会から送られた書簡は、国際女性会議終了後半年経過した1915年10月16日付で永久平和を求める国際女性委員会事務局秘書クリスタル・マクミランから送られた。この書簡は、日本女子大学成瀬記念館が所蔵しており、「成瀬記念館2019」²⁾に掲載されている。

クリスタル・マクミランの手紙には、アジアからの参加者がいないことに気づき、国際女性会議の委員として活動する日本人女性5名を推薦してほしい、日本については、津田梅子、矢島楯子等4人の女性、及び1団体（第日本平和協会）と成瀬仁蔵を、候補者の推薦を依頼できる人物として、推薦いただいたと記されている。成瀬仁蔵は日本女子大学校長という立場で、女性の推薦を依頼したと考えられる。

この会議で採択された決議は大きく2つあり、①女性への参政権の拡大、②戦争を平和的に解決する、ことをあげている。推薦された5人の女性は、この会議の決議に賛同することを条件にする³⁾と書かれている。

President Naruse

Dear Sir

……We hope very much that you will be in sympathy with our resolutions and with the

work we are undertaking. We ask you to find five women in your country willing to become members of our committee. These women would require to be in general agreement with the Resolutions of our Congress, and in particular in definite agreement with the fundamental principles of the extension of the parliamentary franchise to women and the Settlement of the International disputes by peaceful means. ……

マクミランの書簡の最後に、会議の詳細については印刷・出版後、後日送るとあり、成瀬仁蔵からマクミランに宛てた返信の草稿⁴⁾には、1915年10月16日付と1916年2月21日付の手紙を受理した旨の記述があることから、後日会議の報告書を受理していることがわかる。送られた報告書は、12ページにわたる冊子「RESOLUTIONS ADOPTED by the INTERNATIONAL WOMEN'S COMMITTEE FOR PERMANENT PEACE」⁵⁾ではないかと考えられ、成瀬仁蔵記念館に所蔵されている。この冊子に記載されている決議は、大きく7項目にわかれ、そこにさらに小項目があり、全体として20項目に及んでいる。20項目の中には、特に、女性参政権を取得する、男性と同等の権利を要求するなどの記述が多いことが認められ、9⁶⁾には、女性参政権の取得として項目をたてている。審議には女性を含めること、男性と同等の権利を持つこと等、具体的な内容が示されていることがわかる。

RESOLUTIONS ADOPTED.

III. PRINCIPLES OF A PERMANENT PEACE

9. The Enfranchisement of Women.

Since the combined influence of the women of all countries is one of the strongest forces for the prevention of war, and since women can only have full responsibility and effective influence when they have equal political rights with men, this International Congress of Women demands their political enfranchisement.

International Committee of Women for Permanent Peace（永久平和を求める国際女性委員会）は、1919年チューリッヒで開催された第2回国際会議において、団体名を Women's International League for Peace and Freedom（WILPF）とし、以後、現在まで活動を継続し、2015年100周年を迎えた。

3. 成瀬仁蔵の対応

このマクミランからの書簡を受けて、成瀬仁蔵は、津田梅子に声をかけたが、津田梅子は体調が思わしくなく、参加できなかった⁷⁾といわれている。成瀬仁蔵は、日本には平和同盟、あるいは婦人団体のような組織がなく、参加できるような状況にないこと、まず、そのような組織を日本に設置する必要があること、最近、日本女性支部のような組織を設立するような兆しがみられるようになり、国際的な対応は津田梅子が携わるだろうと返事をしている⁸⁾。

……Not long ago, however, we came to a decision to ask a certain number of women (resident in Tokyo,) of culture and position, to form an Executive Committee for establishing

the Women's Branch in Japan of the International Society.

Most of those ladies consented to proposal, and Miss Tsuda among them will work as secretary in change of international correspondence. ……

成瀬仁蔵の返信は1916年9月18日付であり、マクミランからの書簡は1915年10月16日付及び1916年2月21日付であることから、成瀬仁蔵の返信はほぼ1年後であり、当時の郵便事情を考えると、かなり熟慮した上の返信だったのではないかと考えられる。成瀬仁蔵は、日本にも平和同盟のような組織が必要であるが、その前にまず国際問題研究会を組織し、勉強会をすることを提案したが、病気のため親交のあった新渡戸稲造に任せ、1919年3月4日に逝去した。国際問題研究会は、1919年頃から新渡戸稲造の自宅で開催され、成瀬仁蔵の遺志を受け継いだ教え子たち、井上秀子をはじめとして多くの女性たちが集まっていたが、日本女子大学校内の不幸など種々の事情で、2回ほどでしばらく休会という状況だった⁹⁾。一方で、日本女子大学校の同窓会組織である桜楓会では、1920年10月22日から12月15日まで10回の婦人問題講演会を開催することを、1920年10月22日発行の「家庭週報」第585号で会告している。会告¹⁰⁾では、講演会の日時・題目・講師等が掲載されている。一部を下記に示す。

婦人問題講演会第1日 1920年10月22日

「婦人問題と婦人運動」

麻生正蔵 氏

(家庭週報第586号1頁、1920年10月29日発行)

婦人問題講演会第3日 1920年11月6日

「政治上より観たる婦人問題」

鈴木善男 氏

(家庭週報第590号4頁、1920年11月26日発行)

婦人問題講演会第4日 1920年11月14日

「法律上より観たる婦人問題」

穂積重遠 氏

(家庭週報第591号3頁、1920年12月3日発行)

まず、講演会第1日は、麻生正蔵日本女子大学校校長及び桜楓会会長による講演¹¹⁾で、婦人問題をテーマに選んだのは、女性達が自分自身のことを知り、何をなすべきかを考える機会としてほしい、と述べ、婦人問題には、教育問題・参政権問題・職業問題・労働問題・両性問題があり、欧米では、教育問題が下火になった1903年頃から参政権問題が盛んになったと欧米の状況を紹介している。講演会の最後には、参政権問題の参考雑誌として英米独仏の諸雑誌をあげたと書かれているが、実際の諸雑誌名は書かれていない。

講演会第3日、講演会第4日の講演では、第一次世界大戦後、日本の婦人の置かれている地位について、政治上、あるいは法律上、見るとどうであるか、海外の状況と比較して明らかにするといふもので、主として婦人参政権のことが講演されている。

講演会第3日には、東京帝国大学教授 吉野作造が講演する予定だったが、都合が悪くなり、吉野作造推薦の鈴木善男に変更になったとのことである。鈴木善男は、「政治上より観たる婦人問題」と題して、欧米諸国での婦人と政治の状況について講演し、特に、欧米諸国、イギリス・アメリカ・

フランス・ドイツ・イタリア・ロシア・スウェーデン・オランダ等では、第一次世界大戦後、婦人が次々と参政権を獲得した状況を紹介し、日本の状況と比較している。家庭週報第590号には、次のように書かれている¹²⁾。

……大戦前に於て……婦人に男子に對等の選舉権を與へて居たのである故、今や世界の主要なる文明國は何れも婦人の参政権を認むることになった。斯くて婦人は經濟上に於けると等しく政治上に於ても最も偉大なる勢力にとなりつつある。

翻って、我國の状況を見れば最近漸く普通選舉が一般の輿論となった様な有様で、婦人の選舉権は當然除外すべきものとして居る、これは我が國大多數の婦人の現状を鑑みて止むを得ぬ事であるが、前述の世界の大勢を見、これを考ふる時は聊か忤怩たらざるを得ないのである。然し憲法發布以前及憲法發布後我が國に於て婦人参政権を主張した論者は僅かに十指を屈するに足らざる有様である。今日に及んで各種の婦人団体が組織され、多数の運動が行われているが極めて微々たるものである。……

「家庭週報」には、この記述の後、婦人参政権運動については詳細にお話になりました。と綴られているが、鈴木氏が講演された日本の参政権運動の具体的な記述は示されていない。これは、当時の世論を鑑みての対応だったのではないかと考えられる。

穂積重遠（法学博士、専門は民法、東京帝国大学教授、最高裁判所判事、渋沢栄一の孫）は、「法律上より觀たる婦人問題」と題して、今日の日本の法律に公法と私法の區別があることを説明し¹³⁾、

……婦人にも此の法律上の公法的方面と、私法的方面の二方面がある。それで此の公法的方面には如何なる問題が含まれて居るか云ふと、第一は婦人参政権問題、第二普通選舉と婦人の選舉権、第三には婦人職業問題、第四は婦人教育問題等で、是等は皆必要なもので、第一の婦人参政権問題の如きは、私一個人として根本的にこれを與へることに賛成である。しかしこれを受ける婦人自身が果たして此の権利を活用することが出来る様な實力があるや否や、またこれを受ける人々の心の準備が出来て居るか否かが問題である。権利と義務はいつもつきもので、権利を與へられた以上は責任を以て社會生活の義務を果たさねばならぬ。此の準備が出来たならば何時でも婦人に参政権を與へてよい事と思ふのである。其の他の諸問題を婦人に開放することを凡て賛成である。殊に婦人職業問題の如きは法律がこれを助けて其の門戸を開いてやるべきである。

ところで第二の婦人の私法的方面では、どんな問題を取扱ふかと云ふに、これは社會生活の法律で民法に依ることが多い。ところで民法に於ては男女をいかに取扱つてゐるか云と、これは至って単純で、普通の男、女（獨身婦人）の區別は殆どないと云つてもよい。ところが妻といふものに對しては法律は少し不利を與へて居るやうに思はるる點があるが、これは、妻は家と云う狭い社會生活をなす間に自然その範圍が狭められたのである。

日本は昔からこの家と云ふものを非常に重んじて來た結果、法律に於ても家族制度である。ところで家族制度に於ける婦人の地位は如何なるものであるかと云ふことを考えて見ると、封建時代の遺風を受けて婦人の地位は男子と同等になつてゐない。封建制度は家と云うものが何より大切であつた結果、此の家を絶たぬ様にするには 相續人が何よりも大切である。一家の

系統を絶たぬために、此の相續人を得るために、婦人は一種の物質扱ひを受けた。即ち昔の大法令等にも、『子なきは去る』などと公然と子を産まぬ婦人はその家を去ることに定められている。而して相續人たる子孫を得るためには公然に妾をおくことを認められてゐた。斯くの如き犠牲を受けて來た結果婦人の地位は明治時代に及んでも其の傾向があった。然し今日では大分改めれて來た。……要するに法律はいづれかと云へば男子に利あって女子に不利の處が澤山あるが、然し男子と女子は決して相戦ふべきものではなくして相互に助け合つて相共同すべきであると思うのである。……

穂積重遠は、女性に参政権の権利を活用する準備があるか、実力があるか、大事なことは、婦人自身の自覚・意識である、独身の婦人では、民法上、男女の区別はほとんどないといえる。しかし、日本には、封建時代の家制度の影響が色濃く残り、法律は男子に利があり、女子には不利なところもあるが、争うのではなく、穏便に進めることを力説している。

鈴木、穂積いずれも、女性参政権における海外の現状に詳しい法学者であり、日本においては、婦人参政権についての機が熟していないことを語っている。また、日本では、家制度が根強く、婦人の地位は低く、婦人参政権について議論もまだまだの状況であること、議論を高めるためには、婦人自身の自覚も大事であることも強調している。

成瀬仁蔵にマクミランから送られた手紙に書かれていた国際平和会議での決議、女性参政権の拡大を標榜する会議に日本から女性5名を派遣することは日本の社会状況を鑑みると、難しいと判断し、日本独自の婦人団体を立ち上げることを考えたのではないかと思われる。三神和子¹⁴⁾は、ハーグ会議での決議文、特に女性参政権の考え方が婦人平和協会の設立に及ぼした影響について、婦人平和協会を、女性参政権を要求する団体にはせず、平和を求める女性たちの穏やかな団体として、戦前から現在まで続く団体として発展させたと論じている。

4. 婦人平和協会の発足

井上秀子は、「家庭週報」第595・6合併号¹⁵⁾に、「日本に於ける婦人平和同盟」と題して、寄稿している。国際的婦人団体への活動を種々の関係で中止状態だったが、1920年10月に第日本平和協会から、アメリカの平和団体の代表が来日するという情報を受取り、日本における婦人の国際的婦人同盟会の設立に向かわなければ、と感じ、日本女子大学校教授であった井上秀子は、麻生正蔵日本女子大学校校長に相談し、同意を示されたと記述されている¹⁶⁾。アメリカの平和団体代表の来日については、デジタル版「渋沢栄一伝記資料」¹⁷⁾第37巻384～385頁にも記載されている。デジタル版「渋沢栄一伝記資料」37巻384～385頁には、婦人平和協会に関する事項が書かれており、婦人平和協会発会式への招待状などが掲載されている。下記に阪谷芳郎の第日本平和協会日記¹⁸⁾を示す。

阪谷芳郎（法学博士、大蔵大臣、東京市長、専修大学学長、渋沢栄一娘婿）の第日本平和協会日記

○九年十一月十日 ……米国ヨリ平和協会代表ノ婦人某來ル旨の報アリ、女子大学ノ井上秀子・上代たの両氏ニ移牒ス両氏ヨリ婦人平和会ノ組織ニ付話アリ云々

○ 中略

○九年十一月十二日 婦人平和協会ノ件、井上秀子・上代たの二氏來宅相談アリタリ、簡易組織ニテ初ムルヲ可トス、ボールス夫人ニモ相談可然旨ヲ語ル

阪谷芳郎の第日本平和協会日記には、「1920（大正9）年、11月10日アメリカから平和協会代表の女性の来日の連絡があった」と書かれており、これは、家庭週報595・6合併号¹⁹⁾に井上秀子が書かれている内容と一致する。1920（大正9）年、11月10日、及び12日の日記²⁰⁾には、井上秀子と上代たのの2人が、婦人平和協会について阪谷芳郎と相談し、組織について相談をしたこと、はじめは、簡素な形で始めることを話し、阪谷氏が「簡易組織ニテ初ムルヲ可トス……」と承諾したとの記述がある。この記述から、婦人平和協会設立の前年1920年に、井上秀子・上代たのの2人が阪谷芳郎氏宅を訪問し、婦人平和協会について相談をしている様子が認められる。また、成瀬仁蔵が提案した新渡戸家で開催されていた国際問題研究会のメンバーであったボールス夫人にも相談をしていることが読み取れる。

一方、井上秀子は、家庭週報第595・6合併号²¹⁾で、婦人平和同盟にについて、今はその準備会と題して、

この意味の会合は昨年内に於いて既に2回開きました。第1回は（12月5日）、目賀田男爵邸に於て、第2回は女子青年会館に於て何れもまだ此会の主唱者の相談会という程度のもので勿論確定した会の規約とか又会員の資格条件などといふもののなく、この会の名称さへ確定せずに……

と書かれている。阪谷芳郎氏の日記と家庭週報第595・6号の井上秀子の寄稿を総合的に見ると、事前に井上秀子・上代たのの2人は阪谷芳郎氏宅に訪問するなどして、新しい婦人団体について相談し、すでに、11月12日の時点で、簡易組織すること、名称は婦人平和協会と決まっていること等から、婦人平和協会の設立を中心になって進めていたのは井上秀子、上代たのであったといえる。井上秀子は、上代たののに大きな信頼を寄せていたということが伺える。

婦人平和協会は、いよいよ1921年5月3日午後2時、東京、一ツ橋の如水会館で発会式をむかえることとなった。発会式の様子は、東京朝日新聞1921年5月4日発行の朝刊に、タイトル「平和を目標に 目覚めた女性の努力—同志百五十餘を得て—きのふ婦人平和協会の発会式」の記事²²⁾が掲載されている。家庭週報では、611・12号合併号²³⁾及び613号²⁴⁾には、趣意書・創立委員・規約・発会式の様子が掲載されている。参加者は、渋沢栄一・阪谷芳郎等の賛助会員10数名、会員150名ほか、200名ほどであった。この発会式が東京朝日新聞のような一般紙に掲載されたということは世間の関心を集めたニュースであったと考えられる。趣意書²⁵⁾には、平和を求めることが書かれ、規約は、下記の通りである。一部を抜粋すると、

第1章 本會は内外婦人を以て組織し之を婦人平和協會と稱す

第2章 本會は内には國內に於ける婦人の地位の向上に努め外には國際的友情の向上永久平和の確立に努力し以て一國の文化と世界人類幸福の増進に資するを以て目的とす

第3章 本會は前條の目的を達する為左の事業を行ふ

- 一 單獨に又世界婦人の團體と共に平和を確立及婦人の位置向進に必要な運動の開始
- 二 會員研究會の開催
- 三 出版物の發行
- 四 公開講座
- 五 本會の目的に叶える諸団体の活動に対する協賛

六 その他必要又は有益なる事項

以上は事の緩急を計り漸を追ふて着手すること

以下略

とあり、女性の参政権のことには触れず、婦人の地位向上に努め、という文言にとどまっている。また、第3条一では、単独又は世界婦人の団体と共に平和を確立……とあり、世界の婦人団体との連携も視野に入れていることが伺える。

創立委員は、家庭週報²⁶⁾では、井上たか子、羽仁もと子、大橋廣子、目賀田逸子、門野りう子、加藤たか子、河井道子、ガントレット恒子、アウイング雪子、上代たの子、塚本はま子の11名である。しかし、デジタル版「渋沢栄一伝記資料」では、阪谷芳郎氏が受理した婦人平和協会創立委員招待状（4月26日付）²⁷⁾では、14名と3名ほど多い。この違いは何によるのかは不明であるが、その3名は、西邑伸子、戸野みちゑ、神谷信子である。創立委員は、留学経験がある、あるいは海外の事情に詳しい、教育者が多いという特徴があり、上層階級に属する女性たちと言える。

どのような女性が創立委員だったのか、略歴を調べると下記の通りである。

井上 秀子：教育者、日本女子大学校教授、第4代校長、婦人平和協会会長、コロンビア大学・シカゴ大学夏季セミナー参加

羽仁もと子：女性ジャーナリスト、「自由学園」及び「婦人之友社」を設立

大橋 廣子：教育者、日本女子大学教授、第5代学長、シカゴ大学で博士の学位取得

目賀田逸子：勝海舟の3女、官僚・法律家の目賀田種太郎婦人、目賀田種太郎は専修大学及び東京芸術大学の創始者の一人

門野りう子：目賀田逸子の娘

加藤たか子：不明

河井 道子：教育者、女子英学塾卒、恵泉女学園の創立者、プリンマー大学卒

ガントレット恒子：教育者、婦人参政権運動家、作曲家山田耕作の姉、東京女子大学・自由学園で教鞭をとる

アウイング雪子：不明

上代たの子：教育者、平和運動家、日本女子大学教授、日本女子大学第6代学長、日本婦人平和協会会長、ウェルズカレッジ留学

塚本はま子：教育者、東京女子高等師範学校卒、青山女子学院教頭、著書：実践家政学講義・女子の修養と生活改善

西邑 伸子：不明

戸野みちゑ：教育者、東京女子高等師範学校卒、東京女子高等師範学校教諭、女子美術学校（現在の女子美術大学）教頭等

神谷 信子：不明

婦人平和協会としての活動は、家庭週報第614号²⁸⁾には、①近日中に東京市内の小学校教員を招き児童の平和思想要請について懇談会を開く予定、②5月21日目賀田男爵の婦朝講演会の開催するの告知がある。創立委員に教育者が多いこともあり、幼少期の平和教育に重きを置いていたことが考えられる。また、有識者による講演会も数多く開催し、女性達の意識を高め、議論を活発化させる機会としてきたと考えられる。

1921年、オーストリア・ウィーンで開催された婦人国際平和自由連盟（WILPF）の総会には、この婦人平和協会から、代表としてミス・アルウィンを送り²⁹⁾、新渡戸まり子（新渡戸稲造夫人、社会事業家、教育者）、小橋三四（ジャーナリスト、日本女子大学校卒、「家庭週報」編集人、コロンビア大学留学）、アメリカ留学中の和田（高良）とみ子（平和運動家、参議院議員、日本女子大学教授、日本女子大学校英文科卒、コロンビア大学・ジョンホプキンス大学留学、博士）、粉谷よし参加した^{30)、31)}。1921年5月に発会式を行ったその同年の7月のWILPF総会への参加である。この他にもワシントンで開催される軍備撤廃万国婦人大会に出席の要請があり、井上秀子理事長が参加する³²⁾等、婦人平和協会 規約「第3条一 世界婦人団体と共に……」による活動といえる。WILPF 総会帰国後、和田とみ子・新渡戸まり子が家庭週報に寄稿しているが、和田とみ子³³⁾は、会議の様子は、大阪朝日新聞に伝え、家庭週報では、オーストリアの惨状を伝え、物資の支援を呼びかけている。

新渡戸まり子³⁴⁾は、

……ジェーン・アダムス女史の、万国平和婦人自由連盟等ができ、日本婦人もこれに加わりましたし、これらのことは私も結構なものと存じておりますが、この同盟は二つの過激なものからなっておりましたので、日本婦人がこれに加わることはどうかと思っておりました。すなわち、一つは、婦人参政権獲得に、一つは、平和条約に不満足のところがあるから、これに抗議を持ち出そうという運動であります。これがひどく過激な運動で、日本婦人がこれに加わることはあまり好ましくないと存じておりましたが、この頃、これらも、だんだん調和を得てまいりますので、日本婦人が入りました折柄、喜んでおります……」と寄稿している。

これらの寄稿などからも過激な活動は避けたいという気持ち、世界とはつながっていく必要もあるという両面がみられる。

ジェーン・アダムスは1921年のウィーン国際会議の帰途、欧米各国を歴訪後、1923年6月24日来日³⁵⁾、8月17日帝国ホテルで開催された歓迎会には、平和団体や内務省等の社会局、社会事業者等の500名が集まったとのことである³⁶⁾。ジェーン・アダムスについては、「家庭週報」第144号から4回^{37)、38)、39)、40)}にわたり、「米国婦人界に最も名あるミスアダムスの事業 社会部」と題して、ハルハウスを中心とした社会事業活動等について紹介している。また、麻生正蔵は、1905年渡米した際に、ジェーン・アダムスには避暑中のため、会えなかったということを帰朝講演で語っている⁴¹⁾。日本女子大学校では、以前から注目していた人物であったと考えられる。ジェーン・アダムスはアメリカに帰国する際、ウィーンから日本に立ち寄り、アメリカに帰国する道を選んでいるということは、ジェーン・アダムスも日本に対する関心が高かったのではないと思われる。上代たの、門野りう子はジェーン・アダムスから直接 WILPF についてつぶさに聞き、日本の参加を勧められ、そのための準備を始めた、と「WILPF 日本支部50年の歩みに学ぶ」と題して、理事 菅支那氏が「婦人と平和」（第6号）に寄稿している⁴²⁾。婦人平和協会は、1924年第4回 WILPF 国際総会（ワシントン D.C. で開催）で WILPF の日本支部として婦人平和協会の名称の変更をせずに承認された。第二次世界大戦勃発により、1941年活動中止、戦後の1947年、日本婦人平和協会として再発足、1952年 WILPF に復帰した。1963年には婦人国際平和自由連盟（WILPF）日本支部と改称し、2021年、設立100周年を迎えた。菅支那氏の寄稿では、WILPF の第1回の世界大会（1915年）で決議された20の決議には婦人の平和運動に対する原則と政策が6項目にわたって扱っていると書

かれているが、婦人参政権についての言及は見当たらない。こういう状況が続いていることが、2024年日本のジェンダーギャップ指数は146か国中118位という一向に改善されないことにつながるのではないかと考えられる。

謝辞

本研究では、成瀬記念館の資料を利用させていただきました。岸本美香子氏、是恒香琳氏にお世話になり、厚く御礼申し上げます。

註

- 1) 三神和子「ジェーン・アダムズと日本女子大学卒業生たち」『第25回総合研究所研究発表会報告 研究課題79 日本女子大学の草創期における欧米思想の受容—女性の自立と平和をめぐる卒業生たちの活躍』、(日本女子大学総合研究所、2022)、2頁。
- 2) 日本女子大学成瀬記念館編「未発表資料41 WILPF 関連資料2件〜クリスタル・マクミランから成瀬へ ジェーン・アダムスから上代へ〜」『成瀬記念館2019』、2頁、13-18頁。
- 3) 前掲書、13-18頁。
- 4) 前掲書、6頁、20-21頁。
- 5) 前掲書、3頁、16-17頁。
- 6) 9. この項目は、「成瀬記念館2019」には、項目のみの記載であったので、成瀬記念館に所蔵されている「INTERNATIONAL WOMEN'S COMMITTEE FOR PERMANENT PEACE RESOLUTIONS ADOPTED」を閲覧させていただいた。
- 7) 中畠邦「第1章 女性の平和運動への触発」中畠邦・杉森長子編『日本女子大学叢書1 20世紀に於ける女性の平和運動』(ドメス出版、2006年)、31頁。
- 8) 日本女子大学成瀬記念館編、前掲書、20-21頁。
- 9) 「日本に於ける婦人平和同盟 井上秀子」『家庭週報』第595・6合併号、1921年1月1日、3頁。
- 10) 「婦人問題講演会(於日本女子大学講堂)」『家庭週報』第585号、1920年10月22日、1頁。
- 11) 「婦人問題講演会第一日 婦人問題と婦人運動 麻生正蔵」『家庭週報』第586号、1920年10月29日、1頁。
- 12) 「婦人問題講演会第三日 政治上より観たる婦人問題 鈴木義男」『家庭週報』第590号、1920年11月26日、4頁。
- 13) 「婦人問題講演会第四日 法律上より観たる婦人問題 穂積重遠」『家庭週報』第591号、1920年12月3日、3頁。
- 14) 三神和子「ジェーン・アダムズと日本女子大学卒業生たち」、前掲書、2-4頁。
- 15) 「日本に於ける婦人平和同盟 井上秀子」、前掲書、3頁。
- 16) 前掲書、3頁。
- 17) (公財) 渋沢栄一記念財団、「婦人平和協会」『デジタル版「渋沢栄一伝記資料」』第37巻、384-385頁。
<https://eiichi.shibusawa.or.jp/denkishiryō/digital/> (参照 2024.6.30)
- 18) 前掲書、385頁。
- 19) 「日本に於ける婦人平和同盟 井上秀子」、前掲書、3頁。
- 20) (公財) 渋沢栄一記念財団、前掲書、385頁。
- 21) 「日本に於ける婦人平和同盟 井上秀子」、前掲書、3頁。
- 22) 「平和を目標に目覚めた女性の努力—同志百五十餘を得て—きのふ婦人平和協会の発会式」『東京朝日新聞』1921年5月4日、朝刊、5頁。
- 23) 「婦人平和協会発会式」『家庭週報』第611・2合併号、1921年5月3日、10頁。
- 24) 「婦人平和協会発会式 神田一ツ橋如水館にて」『家庭週報』第613号、1921年5月13日、1頁。

- 25) 「婦人平和協会発会式」、前掲書、10頁。
- 26) 前掲書、10頁。
- 27) 『デジタル版「渋沢栄一伝記資料」』、前掲書、384頁。
- 28) 「桜楓会並平和協会記事」『家庭週報』第614号、1921年5月20日、2頁。
- 29) 「婦人平和協会報告（第二回）」『家庭週報』第644号、1922年1月1日、5頁。
- 30) 中畠・杉森編、前掲書、193-194頁。
- 31) 「WIL 日本支部 五十年の歩みに学ぶ 菅支那」『婦人と平和』第6号、1972年1月29日、2頁。
- 32) 「婦人平和協会報告（第二回）」前掲書、5頁。
- 33) 「日本の婦人平和協会に望む 死に面せるオースタリーより 和田とみ子」『家庭週報』第643号、1921年12月16日、1頁。
- 34) 「ジュネバ湖畔に開く 世界市民の集り 婦人平和協会の講演会にて国際連盟議會のお話 新渡戸まり子」『家庭週報』第647号、1922年5月30日、3頁。
- 35) 「ジェーン・アダムス女史の入京」、『家庭週報』第716号、1923年7月6日、2頁。
- 36) 「来朝中のジェーン・アダムス女史歓迎会」、『家庭週報』第723号、1923年8月24日、1頁。
- 37) 「米国婦人界に最も名あるミスアダムスの事業 社会部」、『家庭週報』第144号、1906年5月16日、3頁。
- 38) 「米国婦人界に最も名あるミスアダムスの事業 社会部」、『家庭週報』第145号、1906年5月23日、4頁。
- 39) 「米国婦人界に最も名あるミスアダムスの事業 社会部」、『家庭週報』第146号、1906年5月30日、4頁。
- 40) 「米国婦人界に最も名あるミスアダムスの事業 社会部」、『家庭週報』第147号、1906年6月13日、4頁。
- 41) 「帰朝みやげ 其の一、麻生学監の談」、『家庭週報』第55号、1906年3月31日、2頁。
- 42) 「WIL 日本支部 五十年の歩みに学ぶ 菅支那」、前掲書、2頁。

参考文献

- 1) 成瀬仁蔵著作集委員会編『成瀬仁蔵著作集第1巻』（日本女子大学、1974年）
- 2) 成瀬仁蔵著作集委員会編『成瀬仁蔵著作集第2巻』（日本女子大学、1976年）
- 3) 成瀬仁蔵著作集委員会編『成瀬仁蔵著作集第2巻』（日本女子大学、1981年）
- 4) 麻生正蔵『麻生正蔵著作集』（日本女子大学成瀬記念館 代表 青木生子、1992年）
- 5) 中畠邦・杉森長子編「日本女子大学叢書 1 20世紀に於ける女性の平和運動」（ドメス出版、2006年）
- 6) 日本女子大学成瀬記念館編「JWU1901-2011 A History in Photographs」（日本女子大学、2011年）
- 7) 中畠邦『成瀬仁蔵研究 教育の核心と平和を求めて』（ドメス出版、2015年）

第4章 ジェーン・アダムズの平和思想 ——『平和の新しい理想』を手掛かりに——

Jane Addams View of Peace: Reading *Newer Ideals of Peace*

三神 和子

MIKAMI Yasuko

1. はじめに

ジェーン・アダムズ (Jane Addams 1860-1935) の平和運動は、1915年にハーグに女性たちが集結したことにより発足した「平和と自由のための国際女性連盟」(WILPF)を軸に置いた活動が有名である。彼女が第一次大戦へのアメリカの参戦に反対し、若者に入隊しないように呼びかけたことから、FBIの危険人物リストに登録されたり、戦争終結のために第三国による仲介や調停を提案したことは周知の事実である。しかしながら、彼女の平和運動はそれより以前の1898年、アメリカ＝スペイン戦争によるアメリカのフィリピン植民地化の時から表明されている。彼女は平和に関心を抱き、平和を唱える講演や論文の発表を行っているが、この平和活動の中で見逃してならないのは、彼女の平和についての次の言葉である。「平和とは、ただ戦争がない状態ではなく、生命を育み保護することである」¹⁾。彼女は平和をたんに戦争のない状態とは考えていなかった。では、彼女は平和についてどのように考えていたのであろうか。上記の言葉が述べられている1908年刊行の『平和の新しい理想』(*Newer Ideals of Peace*)を取り上げ、この言葉の背景を考察することで、アダムズの平和についての考えを考えてみたい。

2. ハーバート・スペンサー

マリリン・フィッシャー (Marilyn Fischer) が『『平和の新しい理想』の概念形成の枠組み』(“The Conceptual Scaffolding of *Newer Ideals of Peace*”)において論じているように²⁾、スペンサーの名前を出していないものの³⁾、『平和の新しい理想』(*Newer Ideals of Peace*)においてアダムズがハーバート・スペンサー (Herbert Spencer 1820-1903) の理論を足場にして展開しているのは明らかである。ハーバート・スペンサーは「最適者生存」(survival of the fittest)の言葉を鑄造し、ダーウィニズムを社会にあてはめた社会ダーウィニズム (Social Darwinism) を展開したことで有名だが、彼の考え方は19世紀後半から20世紀初頭にかけてアメリカのビジネスマンたちに強い支持を受け、アメリカ人の考え方に強い影響を与えた。なかでも、「社会学原理」(*Principles of Sociology* vol.1 1876, vol.2. 1979)に展開されている「社会は軍事型から産業型に推移する」という考え方は当時のアメリカを席卷した⁴⁾。スペンサー流行のピークは1882年であり、その年の秋スペンサーはアメリカに招待され、講演し、熱狂的歓迎を受けた⁵⁾。

スペンサーは社会形態は段階を追って推移すると考え、その段階を「軍事型」(militarism)「産業型」(industrialism)と言いつづけた。フィッシャーの説明を借りれば⁶⁾、「軍事型」の段階では、社会は主として外の脅威に対応するために組織された社会である。たいていの場合、社会は「軍事型」と「産業型」の混ぜ合わせでできているが、その社会の特徴は、中央集権化され、階級・階層制度による統制が行われていることである⁷⁾。軍隊において、宗教において、市民政府の組織にお

いて、そして家庭内において「すべての者は自分より上の者の奴隷であり、下の者への暴君」である⁸⁾。戦争好きでない者は軽蔑を持って扱われる。集団の経済的自給は重要で、集団の外との貿易や依存は戦時の生き残りを弱める。交易、文化、博愛といった市民社会の指標は珍しく、中央集権支配の階級制が壊されるので、個人がイニシアティブをとることは抑え込まれる。社会における相互関係とは、「強制的協力」を基にしている。女性は戦うことができないので、低い位置にいる。女性の役目は軍隊のために食料、備品、新しい兵士を供給することである。しかし、「軍事型」の社会は、やがて自然に、もう闘うことがない均衡状態 (equilibration) となり、安定と調和を備えた「産業型」社会に到達する⁹⁾。

「産業型」の段階に達した社会では、再び、フィッシャーの説明を借りれば¹⁰⁾、社会のメンバーを支えるために組織されている。階級制や人々の役割を定める地位はなく、人と人の関係や協力とは自発的であり、取り交わしや契約に基づいている。選挙や代表によって民主的な統治に向かい、政府の役割は非常に限られたものになっている。この社会の特徴は、個人の自由と権利、人間味のある感情、女性や子供を含めた他の人への尊敬である。社会は柔軟性と適応性があり、他のグループとの平和的な交易を行うようになる。スペンサーは平和主義者であるという¹¹⁾。

アメリカのビジネスマンたちは、このスペンサーの社会の進化が辿る軌道を信じ、産業と国際交易においてレッセフェール経済に特徴づけられる産業主義を築いた¹²⁾。彼らは、こうすることで、アメリカは何もしなくても「産業型」の社会に移行できると、さらに、現在アメリカは「軍事型」社会から順調に「産業型」社会に向かっていると考えていた。彼らは平和であればこそ、自分たちの産業と国際交易が発展すると考えて、平和を重んじた。現実的な平和主義者たちには、ビジネスマンたちが多く属していた。

しかし、アダムズは移民、都市の貧者、子供、女性といった社会の底辺に目を向ければ、アメリカ社会には「軍事型」の残存があまりにも多く存在し、現在の社会が自由で平和な社会に向かっているとはとても考えられないと主張する。未だに「軍事型」の身分関係や強制 (coercion) がとても多く見受けられ、このままの状態を放っておくことが、平和に向かう正しい道筋であるとはとても思えないというのだ。その大きな原因の一つは、政府が、つまり政府の法が「軍事型」に依拠しており、国や市の法や規則を現代社会に適應させていないからだと主張する。『平和についての新しい理想』には、市政府における「軍事型」、移民の産業労働、子供の就労、政治における女性の活用、戦争の効力の消滅についての彼女の意見が展開されているが、本論では政府による法についての彼女の考えを見た後、「軍事型」の残存が一番色濃く出ていると思われる移民と子供の産業労働についての彼女の主張をまとめ、彼女の他の著作や論文にも視野を伸ばしながら彼女の理想の社会について考える。

3. 市民政府における「軍事型」の残存

市民政府における「軍事型」の残存に関するアダムズの意見をまとめてみる。

アメリカ合衆国は憲法のもと、すべての国民の自由と自然権を認めているが¹³⁾、アダムズは政府において「軍事型」が残存していることから真の自由を手に入れていない者が多くいると主張する。この「軍事型」の残存は、当時の政府が移民たちとのあいだに征服者と下位者の関係を築いている点に見られる。

その原因は、政府が法律を現在の社会に適合したものへと変えていないからであるとアダムズは言う。現在の法律はトーマス・ジェファークソン (Thomas Jefferson 1743-1826) がイギリスの法を

原型として作ったもので¹⁴⁾、移民がぞくぞくとやって来た現在のアメリカ社会にはよく当てはまらない。イギリスの法は勝者の作った法で、「君主と臣下、法の作り手とその法によって抑制される者とのあいだの関係を土台にしている」¹⁵⁾。初めから、闘いの勝者・征服者と征服されたものとの関係を内包しているのだ。貴族や王がいなくてもかわらず、そして移民の国であるにも関わらず、アメリカはこの法を土台にした。そして、「(国家という) コミュニティーをまとめるために、罰、威圧、強制、軍隊の規約の残骸に頼っている」¹⁶⁾。アメリカの法が実際にイギリスの法律をどの程度手本としているかは別として、アダムズはアメリカには抑圧者と抑圧される者の関係がイギリスを手本にしたために残っていると考えている。もちろん、抑圧される者とは移民たちのことである。そして、現在のアメリカの法、すなわち、アングロ・サクソンの作った一つの基準で様々な国からの移民たちを統治している¹⁷⁾。ケルト系、ドイツ系、ラテン系、スラブ系などの様々な移民たちがぞくぞくと我が国にやってきている。彼らはそれぞれの価値観や政治的理想を持っているが、政府はアングロ・サクソンの「一つの基準で」すべての人びとを治めている¹⁸⁾。一つの基準で異なる価値観を持つ人々を支配し裁くことは圧政を生む。また、アングロ・サクソンの考え方が一番よいというわけではない。「民主主義は私たちのなかにいるこれらの多種多様な人々の経験と希望を民主主義は包含するべきなのに、民主主義を私たちは働かすことができないでいるのだ」¹⁹⁾。

彼ら支配者たちは、なかなか社会の改善をしようとししない。政府は国の現状をよく見ないで²⁰⁾、18世紀のイギリスの学者のように普通選挙権があれば、移民たちの困りごとはすべて帰結すると考えている²¹⁾。しかし移民たちはアメリカの市民権を与えられたということだけで、真の自由や幸せを手に入れてはいない。アダムズも指摘しているように、彼らの自由や権利は産業及び商業の発展と密接にかかわっているからだ²²⁾。それに、彼らは「人々の自発的な生活よりも自分の特権や財産の権利を守ることに関心がある」からである²³⁾。また、国を改革しようとする人々も、移民たちのことを「よく知らない」し、「かけ離れた、自分たちとは異なる」人々なので²⁴⁾、彼らのことなど考えたこともない。「移民たちが国の政治の分担者であり、形成者であることなど、考えたこともない」²⁵⁾。アダムズは移民を仲間ではなく余所者として捉えるこうした姿勢を「下位者にたいする征服者精神の残続」と言う²⁶⁾。

現在の移民の現状をよく踏まえて、政府は規則や考え方を現状に適応 (adjust) させ、社会を進歩・進化 (progress) させないとならないにもかかわらず、適応させようとししない。

4. 産業労働の立法に関する「軍事型」の残存 (移民と子供)

移民と子供の労働に焦点を当てて、産業労働の立法に関する「軍事型」の残存に関するアダムズの意見をまとめてみる。アダムズが考えるには、法や規則を現状に適応させていない社会の側面の中で大きなものの一つは、産業労働における政府の姿勢である。現在の諸問題は産業組織と政府が受け継いでいる民主主義の形の間に何のつながりも持たないことに関係している (121)²⁷⁾。現在の文明は産業のたまものであるにもかかわらず²⁸⁾、その産業を支えている人々を旧態依然の政府保護しようとししない。その産業を支えている、つまり、工場で働いている労働者は、多くの移民が占めているのだが、その人々は多くは技術訓練を受けていない人々であり、次々と人員の供給がなされるために、賃金が非常に低く、労働条件も劣悪である。彼らを雇用している産業組織は最低賃金、労働時間、労働環境、労働条件を保証しない組織であり、政府は介入して、その保障の確保に関する法を準備しようとししない。産業組織の上層の人々は、奴隷である労働者の生活水準など無関心である。工場で働く、またその産業分野で働く白人たちが移民たちを抱合して組合を作り、最低賃金や

労働条件の改善を求めて交渉しても、産業組織は耳を貸さず、政府も積極的でない。労働者は搾取されるばかりである。産業の上層と労働者の間には支配者と奴隷の関係が成り立ち、この構図は強者の勝利と弱者の搾取を表し²⁹⁾、「軍事型」そのものとなっている。

生活水準という問題は現在の産業問題の中心となっている³⁰⁾。移民たちの生活水準が上がり、よりよい生活ができるということは、国が「進化」しているということに他ならない³¹⁾。移民一世から、二世へ、そして三世へと生活水準は上がり、子供たちにも教育をつけざる余裕が生まれないとない。消費能力も上がることは、国の繁栄を調べるテストである³²⁾。いつまでも、移民たちの生活水準が上がらず、その生活水準の低さを「自分たちとは違う人びと」という理由で片づけるわけにはいかない³³⁾。政府も生活水準の問題を抜きに、国民はみな平等だと考えるわけにはいかない。政府が生活水準や多くの市民の産業上の地位という深い問題への関心を拒むかぎり³⁴⁾、私たちは進歩しない。国は労働者の生活水準や待遇に関心を寄せ、法で彼らを保護しないとないのだ。

また、現在、だいぶ以前から交易は国際的なレベルに達しており、この国際的交易のおかげで産業は盛んである。これは商取引の他国への攻撃及び軍事的要塞と新しい市場の強制を要求してきた結果にほかならないが³⁵⁾、国内の産業においても、これは労働者の資産の巧みな分捕りであり、現代の「征服」を代表するものである³⁶⁾。労働者を「奴隷」や「封臣」とみなしている³⁷⁾。この交易を含む産業主義は労働者に対する軽蔑的な姿勢であり、普通的生活水準からかけ離れているということで、何よりも移民にその侮蔑は向けられている³⁸⁾。この構図は「軍事的」社会の構図である。

私たちは現在の法の不十分さを認め、新しい問題に適応する進歩的な法規制のために向かわないとない³⁹⁾。政府は法で社会の底にいる人びとを保護しないとない。

私たちの国は最初の憲法作成時において個人の自由を強調しすぎたために、そして政府は必要に迫られたときのみ抑圧し、軽々しく政府の機能を拡大すべきではないという信念によって、保護のための立法措置が不足している⁴⁰⁾。弱き者たちを助けることは、慈善を行うということではなく、「民主主義の義務」に他ならない⁴¹⁾。慈善は上の者が下の者に行う自己満足であるが、「民主主義の義務」は平等なる者が平等なる者に行う当然の親切である。

そして、この現在の法規制の不十分さの指摘は子供の工場労働にも向けられている。

「民主主義の義務」でなく慈善で弱い人々に対処するというのが、私たちの国が国家として子供の保護に後れを取っている事実の説明となっている⁴²⁾。

最近のセンサス（1900年）では、10歳から14歳の子供のうち読み書きができない子供が合衆国に580000人いるという結果が出た⁴³⁾。もちろんこれらは移民の子供ばかりではないが、南部諸州に570000人、あとは残りに散らばっているという⁴⁴⁾。また、センサスによれば、働いている子供たちも多く、自分で生計をたてている子供たちは200万人いる⁴⁵⁾。その子供たちは、何の技術も教えられないまま、来る日も来る日も単純作業で面白みのない作業に従事し週6日10時間働き、気力も体力も消耗していく。また、子供の身体に合わない重労働に従事する子供もいる。子供の早すぎる労働は私たちの産業界にとって大きな損失である。というのは熟練した労働者が育たないばかりか、貴重な「自由な労働の質」を破壊してしまうからである⁴⁶⁾。子供の労働でできた製品を購入消費すれば、私たちは若者の永遠の精神を、変化する力を、物質主義の犠牲にすることによって、物質主義の真ただ中にとわかれるかもしれない。若者の力だけが私たちをただの機会に退化させるのを防ぐものであるにもかかわらずである⁴⁷⁾。

子供が自由にできる時間を持ち自分の関心事に夢中になったり、遊ぶことで子供同士の団結心を

身に着けたりすることは、子供を市民として育てることにつながり必要なことなのだ。原料や新しい市場の獲得に夢中になるあまり、知的な労働という最も価値ある要素を破壊している⁴⁸⁾。現在の産業は大きな工場の大勢の人々にあらわされるように初期の軍隊のように混乱している⁴⁹⁾。

子供の労働は子供の教育と同じく、国家の問題である⁵⁰⁾。子供の一律の労働法と関連した子供の一律の義務教育法は、国のために教育を受けた生産者を作り出すという点において、非常に重要な要素である⁵¹⁾。

以上のように、アダムズはアメリカ社会は、まだ「軍事型」の特徴が多く残る社会であり、このまま放置することが人びとを平和な社会にたどり着かせるとはとても考えられないと主張する。確かに中産階級の勢いが増し、産業は盛んになったが、「軍事型」は残存しており、この現状が自由と人間味ある人間関係に満ちた社会へと向かわせることはないと言っている。

5. 法律による保護

では、アダムズはどのようにしたいのか。アダムズは弱者には国家の介入、つまり法による保護が必要であると主張する。それも、慈善による保護ではない。「民主主義の義務」(democratic obligation)⁵²⁾として彼らを保護することが必要である。自分と同じ市民や国民として、一つの地域・国を作る「仲間」として、彼らを迎え入れ、彼らに自分の人生の選択ができ、自分の力や個性を発揮できるチャンスを与えることが必要である。そのために彼らが弱者であるうちは法律でもって保護をすることが同胞としての義務なのである。どのような「仲間」であっても、その人を保護し育て活かすことができ、初めて平和な社会が訪れたと言えるのだ。

アダムズは現在(当時)の法律は十分ではないという。アダムズはアメリカの憲法自体が、独立時に作られたもので、勝者の憲法であり、スペンサーの理論には当てはまるものの、独立時から変化・進化した現代の社会には不足のものとなっていると主張する。勝者の作った法律は当時の勝者に有利なものになっており、現在の移民が多くやって来ている現代社会には合わないのだ。現在、アメリカには先にやってきた者たちの支配と後からやって来た者たちへの搾取が存在しており、その搾取の上に先にやって来た者の成功が成り立っている。勝者たちはスペンサーの過酷な生存競争の後「産業型」の平和な社会が訪れるという説を信じ、弱者を搾取し切り捨てているが、それは、自分たちを正当化する言い訳に過ぎない。あとから社会に参入した者たちも成功や自己実現の機会が掴めるように、法律を変容・適応させないとならないのに、アメリカは、それをやっていないのだ。そのせいで、勝者による支配と強制が続行し、支配者と奴隷の関係が存続している。

繰り返せば、アダムズはこのようなことをし続けていても、平和な社会にはならないと考える。スペンサーは「軍事型」社会で闘争する者たちを闘争するに任せておけば、やがて、自然とその闘争は収まり、「産業型」社会に移行すると主張するが、それでは、弱者は自然淘汰され、消えていくことになる。貧しき人びとや移民は不適格者として排除されてしまう。スペンサーの考える平和で調和に満ちた自由な社会にたどり着けるのは強者だけであり、弱者は途中で淘汰されるのだ。スペンサーのレッセフェールの肯定、つまり、国家が社会の「自然な」成長に干渉することを嫌い、国家が教育を援助したり、衛生管理を行ったりすることに反対する彼の考えを⁵³⁾、アダムズは容認することはできない。

アダムズは移民も貧者も一人一人が国家を形成するメンバーであり、その全員が共に自由で幸せで、平和な社会に暮らさないとしないと考える。平和な社会に移行するのなら、メンバー全員が

移行しないと考えると考えるのだ。

彼女が語り掛けている相手、つまりこの本の読者は、スポンサーを信奉している人びと、すなわち、アメリカの富裕層や中産階級の人びと、そして成功したビジネスマンたちである。彼らは経済競争、つまり、「軍事型」社会において勝ち残った強者・「適格者」であり、スポンサーの言う通り、レッセフェールを貫徹し、やがて、自然に、社会は平和な「産業型」に移行できるのだと信じている。移民や貧者たちは、「不適格者」であり、現在彼ら貧者と自分たち強者が併存しているのは進化の過程において自然なことである。やがて「不適格者」たちは消滅していく運命にある。

スポンサーの信奉者でビジネスに成功しているその代表者を挙げれば、アンドリュー・カーネギー (Andrew Carnegie 1835-1919)、ジョン・D・ロックフェラー (John Davison Rockefeller 1839-1937) などが挙げられる⁵⁴⁾。とくにカーネギーはスポンサーと親交を深め、親友となり、彼をベタ褒めした⁵⁵⁾。しかし彼女は彼らに本当の平和を目指すのなら、どうすべきなのか考えてほしいのだ。

6. 新しい人道主義 (A new humanitarianism) へ

しかし、もちろん、平和を実現するには法律だけに頼っていればよいというわけではない。「平和とは何を意味するか」(“What Means Peace” 1899)において「新しい状況はつねに道徳を進化させて、新しい道徳 (a new morality) を必要とする」と言い⁵⁶⁾、新しい時代には新しい道徳が必要であることを説いているように、アダムズは社会改革にはその進化に合った新しい道徳が必要であると考えている。彼女が要求する弱者保護の法律はその新しい道徳に沿った法律である。

この道徳とは、アダムズが『民主主義と社会倫理』(*Democracy and Social Ethics*) (1902年)などで繰り返し説き、彼女の活動の基盤となっている生き方、すなわち、「民主主義」を実践することである⁵⁷⁾。このように、アダムズにおいて平和と民主主義の実践とは密接に結びついている。

アダムズにとって民主主義とは、ただの選挙権の獲得を意味するだけではなく、ただの理論でもなく、生き方の指針となる道徳の問題でもある。その道徳とは、社会のすべてのメンバーが、お互いを理解し仲間として認め合い、互恵しながらともに生きることをよしとする生き方の規範である。個人が階級も言葉も考え方も歴史も異なるグループのたちを、同じ共同体・市民社会・国家を作っている仲間として迎え入れ、互いに関心を持ち、尊敬しながら、そして互恵しながら、共存していくこと、これが民主主義の生き方である。異なる者同士は、異なるままで、一つの基準に、例えばアングロ・サクソンの基準に合わせられる必要はない⁵⁸⁾。アングロ・サクソンの考え方が一番優れてるということはないからだ⁵⁹⁾。多様性こそ社会を強くするものである。その時互いを理解するのに必要とされるのが、「共感的理解」(sympathetic understanding)である。考え方も価値観も異なる人たちを理解し、受け入れること。この「共感的理解」には想像力が必要である。異なる人を仲間として自宅に招待してこそ、社会は進歩するとアダムズは考える⁶⁰⁾。

アダムズは民主主義は横方向 (lateral) に進んで行くべきであると考えている。「民主主義の社会化」(socializing democracy)である⁶¹⁾。民主主義の恩恵を受けるのは、エリートや富裕層、中産階級の人々、アングロ・サクソン系の人びとに限られるのではなく、経済的にゆとりのない人びと、アフリカ系アメリカ人や移民を含んだすべての国民に享受されなければならない。教育や衛生、芸術、自己実現の機会などへのアクセスにかかわる公平さや平等は、すべての人が手に入れなければならない。民主主義は国中の人々に行き渡り社会化 (socialize) されてこそ、価値があるのだ。したがって、女性も民主主義の恩恵に預かるのが、よい社会である。アダムズにおいて女性参政権獲得は、権利の主張というよりも、この横方向の「民主主義」の進展の考え方に基づいている。社

会是一部の人が他の人を犠牲にして成功するよりも、みんなで共通の運命として発展するほうが進歩する。

この道徳は『平和の新しい理想』のなかでは、誰の心の底にもある親切心（goodwill）を発揮することであると表現されている⁶²⁾。親切心（goodwill）とは、他人を好意的に受け取り喜んで助け、協力しようとする姿勢である。シカゴのハルハウスの活動で移民たちと触れ合い、彼らと親交を深めるなかで、アダムズは移民たちが貧しいながらも、親切心をもって助け合いながら暮らしているのに感銘する。まず、彼らは、出身国も、言葉も、宗教も、価値観も異なるなかで、その違いを打ち消すことなく、違いを乗り越えて結びつき⁶³⁾、団結し⁶⁴⁾、一つのコミュニティーのような一体感をはぐくむ。彼らの違いは表面的なことで、生きていくことにおいて本質的なことではなく、人間性の類似点のほうがずっと重要で基本的な関心ごとであるからだ⁶⁵⁾。人間を類似させているもののほうが、彼らを分け隔てているものより、ずっと強く根源的である⁶⁶⁾。同じ人間として結びつくことによって、生き延びる力を増強するのだ。これは労働組合を組んだ労働者たちが、労働争議において立ち向かうとき、人種や出身国を超えて結びつき団結して、生き残るための困難にたち向かった時にもみられる。

そして、その結びつきのなかで、移民たちは互いに平等で⁶⁷⁾、互いを「隣人」と思い⁶⁸⁾、「同胞」と思い⁶⁹⁾、「活気に満ちた兄弟の関係」を築く⁷⁰⁾。彼らは貧しくぎりぎりの生活の中でも、そのコミュニティーの中の「隣人」に思いやりを持ち、「親切心」を発揮し、「利他的」（altruistic）な行動をとる⁷¹⁾。この親切心からでた利他的な行動は住民のこころのなかで社会正義（social justice）の要求に結びつけられる⁷²⁾。このとき注目すべきなのは、この社会正義の要求が、社会の圧力のなかで自分の周りの弱い同胞がつぶされないように守るばかりでなく、自分がつぶされて死なないようにするためのものである点である。利他的な衝動は、結局は利己的な衝動と合体し、それが社会道徳（social morality）の力となっているのだ⁷³⁾。アダムズはこれらの移民の生き方のなかに人間の普遍性を見てとり、自分たち人間全体の生き方に導き入れる。つまり、このように互いに結びつき、互いに思いやりを持って、利他的であること。その親切心を形に表し、実行すること。これが新しい時代にふさわしい生き方の指針であり、新しい社会道徳である。そして、この社会道徳は、結局は自己の防衛に、自分が生き延びることに、人々が人生をより豊かに送ること、人の人生の養育（nurture）につながるのだ。

また、この新しい道徳は『平和についての新しい理想』において、18世紀の人道主義と区別して「新しい人道主義」（a newer humanitarianism）とも呼ばれている⁷⁴⁾。18世紀の人道主義は、現在の民主主義の理論や慈善活動が依拠しているものだが⁷⁵⁾、「人間の権利」を主張するばかりで、実際の人間を知らずに形作られた哲学であり⁷⁶⁾、人間の温かみを知らない机上の空論に過ぎないとアダムズは言う⁷⁷⁾。

この「新しい人道主義」はアダムズが「社会的セトルメントの主観的必要性」の中で述べている初期のキリスト教徒たちが実行していた人道主義につながっていると考えられる。アダムズはハルハウスの設立目的の一つに、初期キリスト教の人道主義運動を実行することを挙げ（「社会的セトルメントの主観的必要性」15）、人道主義という言葉を使用しているが、このキリスト教の人道主義が「本当の民主主義」（true democracy）の「仲間同士」（fellowship）の関係を築いていると述べていることから⁷⁸⁾、このキリスト教の人道主義は『平和についての新しい理想』で展開している「新しい人道主義」と同種のものと考えられる。愛を「宇宙の力」（cosmic force）と信じ、あらゆる人を敵と思わず愛で包み⁷⁹⁾、一団となって結びつくという初期のキリスト教の人道主義は⁸⁰⁾、彼

女のハルハウス創設の動機の一つとなっている。

今、私たちは「産業主義の時代から人道主義の時代へ現れ出ようとしている」のだと⁸¹⁾、アダムズは希望を抱く。いわゆる産業主義は産業を第一と考えるために、一部の者の利益追求のせいで「軍事型」が残存してしまう。だから、私たちは産業中心主義から人間中心主義へ向かうべきなのであり、早くも、その兆候が見えてきていると彼女は言う。

7. 国際間の平和

そして、この生き方を国と国との関係に応用すれば、戦争をなくすばかりか、どの国の人の生も養育する平和な世界を築けるとアダムズは考える。世界を一つの全体 (whole) と考えて、どの国も仲間として共に生きることができる「親切心の国際主義」(internationalism of goodwill) を展開すればよいのだ⁸²⁾。

確かに、人々の心のなかには戦争へ参加し武勇をたてることを英雄視して、闘いに高揚感を覚える者もいる。しかし、その英雄的高揚感は、社会に親切心を発揮することで得ることができ、この新しい人道主義の発揮のほうが戦争よりも攻撃的であるとアダムズは主張する。そして彼女は戦争の代替物という発想を持ち出す。この戦争の代替物という発想は、ウィリアム・ジェイムズ (William James 1842-1910) のことが提案したことで有名で、この本でも「アメリカの哲学者」としてジェイムズのことをほめかしているが⁸³⁾、そして彼女はジェイムズと1998年からの知り合いであり、1904年に行われた13回普遍的世界平和会議 (the Thirteenth Universal Peace Congress) でも一緒であったが、彼女も戦争の代替物の発想は1899年から主張している。ジェイムズは「社会の中に戦争に匹敵する英雄的なもの、精神に充足できるものを見つける必要がある」と提案しているが⁸⁴⁾、アダムズはその戦争に匹敵する英雄的高揚感の代替物として、社会に貢献する労働や「人間の生の養育」(the nourishing of human life) を挙げている⁸⁵⁾。「新しい人道主義は戦争よりも攻撃的で、行動の規範と同様に感情の刺激の点で戦争の代わりとなる」⁸⁶⁾。「この新しい英雄的行為を称賛し、戦争や破壊にかかわる英雄的行為を日に日に大切に思わなくなれ」⁸⁷⁾、「各々の国が自然な経過として、たくましい親切心が戦争の精神の代わりとなる時期に達することを私たちは予測できる」と言っているごとくである⁸⁸⁾。「戦争の代替物としての養育」⁸⁹⁾の考えが普及すれば、それぞれの国において戦いを英雄視する価値観はなくなり、また、国が他の国に復讐するなどという思いはなくなるだろう。つまり、戦争はなくなるだろう。愛国心といった国への忠誠心は戦争好きな時代が持っていた徳の残存に過ぎない⁹⁰⁾。

アメリカ国内の改革と世界の平和はアダムズの中でつながり、「新しい人道主義」で国と国とが共に生きるという国際主義が築かれる。

8. まとめ

以上のように、アダムズは当時、このままいけば、平和な社会に進むことができると思い込んでいる人々に、このままでは平和には辿り着けないことを、現在の社会を改革する必要があることを力説する。この主張を支えているのは、彼女の平和観、つまり、平和とは戦争がない状態ばかりでなく、人々が人間らしく暮らし、それぞれの人生の希望にアクセスできることを意味する。それを彼女は「人の生の養育」という言葉で表しているが、この「養育」を行うのは社会であり、一人一人の人間である。これは彼女の民主主義を基盤とする主張：人々が階級や人種を超えて互いを「隣人」と思い、互惠する一つの共同体を作っているという意識を持ち、それを実践することに基づい

ている。

そしてこの意識はコミュニティー、市、国の単位で育成されるばかりでなく、国際間で共有されることができ、それが国同士の戦争のない世界を築くことができると彼女は主張する。彼女の考える「民主主義」の思想は世界における平和思想を支えている。

アダムズの中で「軍事主義」は「民主主義」と真っ向から対立する。それは、強制と養育、戦争と平和の対立である。

このようにアダムズは彼女の国における富める者と貧しきものたち、先に移民してきた者たちと後から移民してきた者たち、アングル・サクソン系の人びとと、そうでない者たち等を巻き込んだ強者と弱者の間の分断を説明し、アメリカが平和に向かって前進するには社会の分断を肯定し強者である富裕層だけの生き残りによるよりも、その分断を取り除き、社会の全員が一同となることが必要であると説く。そして、そのための法律による保護と人々の意識の改革を訴えている。

註

- 1) Jane Addams, *Newer Ideals of Peace*. London: Macmillan Co., Ltd, 1907. Leopold Classic Library. からの複製版、238頁。
- 2) Fischer, Marilyn, “The Conceptual Scaffolding of Newer Ideals of Peace.” Fischer, Marilyn, Carol Nackenoff, and Wendy Chmielewski, ed., *Jane Addams and the Practice of Democracy*. Urbana and Chicago: University of Illinois Press, 2009. 8章。
- 3) アダムズはハーバート・スペンサーを『ハルハウスの二十年』（*Twenty Years at Hull-House*. New York: Macmillan Company, 1910. で言及している。たとえば、p.404, 414。
- 4) Richard Hofstadter, *Social Darwinism in American Thought*. Beacon press, 1944. 後藤昭次、訳、『アメリカの社会進化思想』東京：研究社、1973。2章。
- 5) 前掲書、48頁。
- 6) Fischer、前掲書、164頁。また、ハーバート・スペンサーの社会類型に関しては、Rumney, Jay, *Herbert Spencer's Sociology*. London: Rationalist Press. Chapter 3. 山田隆夫『ハーバート・スペンサーの社会学』名古屋：風媒社、1944. 第3章に詳しい。
- 7) 前掲書、167頁。
- 8) 前掲書、167頁。
- 9) Hofstadter、前掲書、42頁。
- 10) Fischer、前掲書、167-8頁。
- 11) 前掲書、168頁。
- 12) 前掲書、168頁。
- 13) 1868年合衆国憲法修正第14条は法の下での平等を定め、市民権を保証し、合衆国に出生または帰化した者、その管轄下にあるすべての者の合衆国及び、住居する州の市民権を認めている。
- 14) Jane Addams, *Newer Ideals of Peace*、前掲書、33頁。
- 15) 前掲書、33頁。
- 16) 前掲書、34頁。
- 17) 前掲書、47頁。
- 18) 前掲書、47頁。
- 19) 前掲書、47-8頁。
- 20) 前掲書、49頁。
- 21) 前掲書、42頁。
- 22) 前掲書、42頁。
- 23) 前掲書、33頁。

- 24) 前掲書、49頁。
- 25) 前掲書、49頁。
- 26) 前掲書、49頁。
- 27) 前掲書、121頁。
- 28) 前掲書、123頁。
- 29) 前掲書、12頁。
- 30) 前掲書、116頁。
- 31) 前掲書、116頁。
- 32) 前掲書、117頁。
- 33) 前掲書、116頁。
- 34) 前掲書、118頁。
- 35) 前掲書、115頁。
- 36) 前掲書、116頁。
- 37) 前掲書、116頁。
- 38) 前掲書、116頁。
- 39) 前掲書、119頁。
- 40) 前掲書、151頁。
- 41) 前掲書、153頁。
- 42) 前掲書、153頁。
- 43) 前掲書、153頁。
- 44) 前掲書、153頁。
- 45) 前掲書、153頁。
- 46) 前掲書、163頁。
- 47) 前掲書、164頁。
- 48) 前掲書、164頁。
- 49) 前掲書、179頁。
- 50) 前掲書、167頁。
- 51) 前掲書、168頁。
- 52) 前掲書、153頁。
- 53) Hofstadter、前掲書、41頁。
- 54) 前掲書、45頁。
- 55) 前掲書、45頁。
- 56) Jane Addams, “What Peace Means.” *Jane Addams on Peace, War and International Understanding. 1899-1932.* ed., Allen F. Davis. New York: Garland Publishing, 1976. 11頁。
- 57) Addams, Jane. *Democracy and Social Ethics*. London: Macmillan Co. Ltd., 1902. Leopold Classic Library からの復刻版。1 章、序文。
- 58) Addams, *Newer Ideals of Peace*、47頁。
- 59) 前掲書、47頁。
- 60) Jane Addams, “The Subjective Necessary for Social Settlement.” *The Jane Addams Reader*. Ed., Jean Bethke Elshtain New York: Basic Books, 2002. 15頁。
- 61) 前掲書、17、19頁。
- 62) Addams, *Newer Ideals of Peace*、15頁。
- 63) 前掲書、14頁。
- 64) 前掲書、16頁。
- 65) 前掲書、17頁。
- 66) 前掲書、17頁。

- 67) 前掲書、14頁。
- 68) 前掲書、19頁。
- 69) 前掲書、18頁。
- 70) 前掲書、19頁。
- 71) 前掲書、17頁。
- 72) 前掲書、17頁。
- 73) 前掲書、18頁。
- 74) 前掲書、15、28-29頁。
- 75) 前掲書、28頁。
- 76) 前掲書、29頁。
- 77) 前掲書、28-29頁。
- 78) Jane Addams, “The Subjective Necessary for Social Settlement.” *The Jane Addams Reader*. ed., Jean Bethke Elshtain New York: Basic Books, 2002. 23頁。
- 79) 前掲書、23頁。
- 80) 前掲書、24頁。しかし、もちろんアダムズは宗教をセトルメント活動に持ち込んでいない。宗教は dogma や creed となって、人を一つの考え方に執着させ、他の考え方を排除することから、人と人との結合を許さないことから、アダムズは自分の活動に宗教を持ち込まない。ハルハウスは、様々な宗教の人々が集い経験を分かち合う場となっている。
- 81) Addams, *Newer Ideals of Peace*、15頁。
- 82) 前掲書、23頁。
- 83) 前掲書、24頁。
- 84) 前掲書、24頁。
- 85) 前掲書、24頁。
- 86) 前掲書、26頁。
- 87) 前掲書、24頁。
- 88) 前掲書、26頁。
- 89) 前掲書、26頁。
- 90) 前掲書、27頁。

参考・引用文献

- Addams, Jane. *Democracy and Social Ethics*. London: Macmillan Co. Ltd, 1902. Leopold Classic Library からの復刻版。
- . *Newer Ideals of Peace*. London: Macmillan Co. Ltd, 1907. Leopold Classic Library からの復刻版。
- . “The Subjective Necessary for Social Settlement.” *The Jane Addams Reader*. ed., Jean Bethke Elshtain New York: Basic Books, 2002.
- . *Twenty Years at Hull-House*. New York: Macmillan Company, 1910.
- . “What Peace Means.” *Jane Addams on Peace, War and International Understanding. 1899-1932*. ed., Allen F. Davis. New York: Garland Publishing, 1976.
- Fischer, Marilyn, “The Conceptual Scaffolding of ewer Ideals of Peace.” In *Jane Addams and the Practice of Democracy*.
- Fischer, Marilyn, Carol Nackenoff, and Wendy Chmielewski, *Jane Addams and the Practice of Democracy*. Urbana and Chicago: university of Illinois Press, 2009.
- Richard Hofstadter, *Social Darwinism in American Thought*. Beacon press, 1944. 後藤昭次、訳、『アメリカの社会進化思想』東京：研究社、1973。
- Rumney, Jay, *Herbert Spencer's Sociology*. London: Rationalist Press. 山田隆夫『ハーバート・スペンサーの社会学』名古屋：風媒社、1944。

第5章 平和を祈りて——磯野富士子と WILPF——

A Prayer for Peace: Fujiko Isono and WILPF

牛山 通子

USHIYAMA Michiko

はじめに

磯野富士子（1918-2008）はモンゴル研究家として知られている。第二次世界大戦下、戦争の悲惨さを体験し、戦後、恩師上代タノの勧めで女性の平和団体である WILPF (Women's International League for Peace and Freedom: 婦人国際平和自由連盟) に入会した。平和活動家として、磯野富士子と WILPF との関係について考察したい。

1995年夏、WILPF アメリカ支部のエリー・ブルースティンと日本支部の石尾美代子は、当時、活躍していた日本人女性14人にインタビューをし、図1 英文冊子 *14 Tokyo Women Committed To*

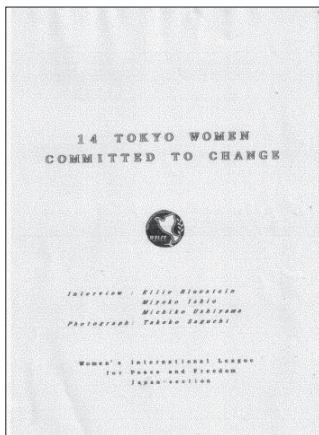


図1 14人の女性を紹介した
英語版冊子



図2 写真展チラシ

Change (写真家、佐口武子のポートレート付き) を作り、WILPF 国際コンGRESでの参加者に配布した。この14名の女性たちについて、日本でも紹介することになり、1996年、「今を翔る女性たち」と題して図2 写真展を開催した。資料として英文の冊子を日本語に翻訳し30部ほど配布した。磯野富士子は14人の女性たちの一人である。この時のインタビューは簡潔に磯野富士子の生涯を語っており、彼女の人物像を知る上で大変貴重な資料である。このインタビューを活用、補足を加えながら磯野富士子を紹介することから始めたい。

I. 磯野富士子について～「今を翔ける女性たち」の冊子、インタビューから～

1. 母親との葛藤

磯野富士子は広島に生まれた。父親は「日本の潜水艦の父」として知られる穂積律之介、祖父は法学者、穂積鎮重、その妻、歌子は渋沢栄一の長女である。富士子は渋沢栄一の曾孫にあたる。4歳のとき、東京へ転勤になり、日本女子大学付属の小学校からやがて上代タノ教授の下で英文科へと進んだ。後に小説家、野上弥生子に説得されて、法社会学に関心を寄せる研究者であった磯野誠一（1910-2004）と結婚した。

インタビューで、図3 磯野富士子は「母親の世代は、天皇制、超国家主義の社会に服従するよう

教育されていました。突然、その子供たちは学校で自由、平等、民主主義を教わったのです。みなさんそのショックはお分かり下さるでしょう」と述べている。磯野は、母親が旧弊な家族制度の中で、教育されたように躰られることは受け入れがたかった。

若いころ、母親との葛藤に苦しんだ磯野は、WILPFで指導的立場で活躍した18人のメンバーの一人として、インタビューを受けた。“Louisa May Alcott and such. I wanted my mother to be like Mrs March in *Little Women*. I was so influenced by the Western Ideas of mother-daughter relationships that I thought my mother didn't love me at all.¹⁾”と答えている。民主主義の母親像を『若草物語』のマーチ夫人に重ねていたのかもしれない。



図3 磯野富士子
(佐口武子撮影)

2. モンゴル研究の道

磯野はインタビューの中で、「夫は法律の社会科学的側面に興味がありましたが、戦時下の日本では強い制限がありました。結婚一年後夫は有名な人類学者、江上波夫先生のすすめで、モンゴルに遊牧民の実施調査に行くことが決まりました。モンゴルは1943年日本軍の占領下にあり、私たちは旅行できたのです。1年2ヵ月私達は辺境の町に住んだ後、そこからさらに遊牧民の生活がいくぶん維持されている奥地へ出かけました。寒かったこと。モンゴルの人々は私達が軍の関係ではなかったから、家に泊めてくれました。ヨーロッパの探検家は旅行にモンゴル人を雇ったものですが、私達は5人のモンゴル人と一緒に、ラクダ車の隊列に入って旅行しました。当時、私のつけていた日記は東京で出版されました。またのちに文庫で1986年に再出版されました²⁾」と語っている。

インタビューは続く。磯野「戦争直後夫がソ連軍に抑留され、2年半行方不明となりました。私は北京の従弟の家で、夫を待っておりまして。以前に私はベルギー人の学者・神父であったモスタールト師にお目にかかっていました。彼はモンゴルに20年住んだことがあり「オルドス口碑集」を編集し、また、「モンゴル仏語事典」を編集しておりました。私は「口碑集」の日本語翻訳をはじめて、長い年月の後に1966年に東洋文庫から出版いたしました。私は北京からLSTで引き揚げました。それから結核の治療と療養のため2年間サナトリウムにおりました。夫は1948年にウラン・バートルから帰国しました。無事だったのです。私が普通の生活に戻った時は、1950年になっていました。」

【モスタールト師と『オルドス口碑集』】について

磯野夫妻が現地での学術調査のために、モンゴル語を本格的に学ぶ必要が生じたことから、モスタールト師との出会い、モンゴル研究への本格的な道を歩むことになった。はじめての出会い、1943年であり、モスタールト師から貴重な『オルドス語辞典』二巻、三巻を送られた。翌年には、全700頁にのぼる大冊の「オルドス口碑集」も贈られ、磯野は、戦時中、『オルドス語辞典』と仏和辞典を頼りに「オルドス口碑集」を読み始めた³⁾。

アントワヌ・モスタールト師(1881-1971)はベルギー人で、1906年から1925年までの19年間を、伝道のためオルドス地方の南部で過ごした。この間に土地の人たちから採集した口碑伝集をローマ字で転写したものが、1937年に輔仁大学でのモニュメント・セリカより *Textes Oraux Ordos* 『オルドス口碑集』として出版された⁴⁾。

その内容は、直接採取した説話、逸話、歌謡、謎々、こどもあそび、祝詞、まじない、呪詛、侮辱、罵り、格言、措辞、ことわざ、常套句等とあらゆる口承の言語表現を取めたものである。この100年くらいの間に、失われたり、大きな変化を受けたりしてきた事象も含め、モンゴルの言語学、民族学、歴史学にとって、極めて貴重な資料である⁵⁾。磯野富士子は、モンゴル語と日本語の関係を「モンゴル語はその構造上、ほとんどそのまま日本語に移すことができる」とフランス語訳との違いについて述べている⁶⁾。

モスタールト師と磯野富士子の交流は、モスタールト師が1971年に帰天されるまで続いた。磯野による「オールドスの民間伝承」の出版について、オールドス口碑集の日本語翻訳は1944年に開始され1949年にほぼ完成していたが、出版されたのは1966年であった。これは部分訳で、原典の6分の一、磯野の感覚では一割程度、訳稿のほとんどが日の目を見ていないことになる⁷⁾。

モスタールト師は磯野の勉強が滞ることのないように、戦後の不自由な時にテキストや辞書を惜しみなく与えた。磯野は彼の恩恵に心から感謝し、畏敬の念すら抱いていた。人柄もさることながらモスタールト師の「学問への道」への信念を『冬のモンゴル』の中で、磯野は尊敬の念を込め、紹介している。「人間が人間である以上これは夢であるかもしれないけれど、研究の対象を検討するのと同じ客観的な冷静さを持って、自己の心と行動を批判することに努め自我を捨てて真理につくことを願う人たちが、共通の研究目的によって結ばれたなら、それはこの世で作りうる最も美しい人間関係の一つではないだろうか。」磯野自身は「自分の進もうとする行く手にモスタールト師やキューリー夫人を見るときに、私は真の学問の持つ可能性を信じたいと思う⁸⁾」と真摯な学者としての姿勢を示している。

3. 上代タノの愛弟子として

磯野富士子は、第6代日本女子大学学長、第4代 WILPF 日本支部会長、世界平和アピール7人委員会委員などを歴任した、上代タノ（1886-1982）の愛弟子である。上代タノの勧めで、日米学生会議に出席した時のことを「1939年上代先生はカルフォルニア大、ロスアンジェルス校 U.C.L.A. で行われた第6回日米学生会議に出席するよう申されました。その翌年には代わりに米国の学生が訪日することになっていました。私たちは最終グループであり、だんだん悪化する日米関係の中でその改善を目指しておりました」と述べている。

磯野は、「1940年後半に私は上代先生の助言もあり、婦人国際平和自由連盟（WILPF）に入会しました。」そして、「日本中の何千もの母や妻が、海外から未帰還の息子や夫を待ち望んでいたのに、私の夫は私のもとに安全に帰還できたので、私は平和のために働かねばと負い目を感じたこともあります。戦争が終わった直後、日本の平和団体は多数あり非常に活発でしたけれども、ほとんど政党と結びついていて、私はそれを好みませんでした。WILPF は原則として政治から独立していました。1960年私はノルウェーの国際夏期セミナーと、ロンドンの国際実行委員会に出席して、WILPF の仕事に感銘を受けました。以来30年間、私は多かれ少なかれ、WILPF の仕事につくしております」と述べている。

磯野「1952年私はハーバートの国際セミナーに5人の男性参加者と共に、唯一の女性として行きました。ヘンリ・キッシンジャーがヨーロッパ、アジアからの参加者の8週間にわたる会期中の世話役をしました。ルーズベルト夫人が民主主義についての公開講演の後、質問を求められました。私は手をあげて「日本は戦後アメリカ民主主義を学んだ。しかし今アジアをよく理解するオウエン・ラティモア氏の受難を目にしています。（ちょうどマッカシー上院議員の非アメリカ活動聴聞

会の最中でした。)それで私はいわゆるアメリカ民主主義にはがっかりさせられました」と申しました。後からキッシンジャーになぜ他の日本人は話をしないのかと聞かれました。私は事前に「適当な」人物を選ぶ委員会があるのでと答えました。すると彼は野太い声で「そんなら貴方は何故入れたのか」と申しました。日本に帰って後、私は彼から丁重な手紙を貰い、次の年のハーバード・セミナーへの日本からの候補者を推薦して欲しいとのことでした。こうして私の推薦したのが、'94年度のノーベル文学賞受賞の小説家、大江健三郎さんです。」上代に見込まれた磯野は、海外の会議に出席する機会を与えられ、貴重な経験を積んでいった。

4. イギリス、リーズ大学留学中の経験

磯野「1954年、また上代先生の御すめにより、私は英国文化振興会に応募し、許されてリーズ大学の社会科学部で、19世紀の英国の家庭内での女性の位置につき研究することになりました。復活祭の頃日本人グループが原爆について講演にやってきました。英国は当時議会で核武装を英国はすべきであるという討議の最中でした。リバプールの一紙は「4人の日本人が原爆反対の講演にやってきたが、もっと良い通訳がいなかったならば誰にも理解してもらえないだろう」と報じておりました。そこで私はこのグループのために通訳をすることにしました。英国文化振興会の奨学生は政治行為を禁じられていましたから、私は迷いました。WILPF 英国支部の会員にもし私の奨学金が打ち切られたら、支援してくれるようお願いしました。彼女は支持を約束してくれましたが、私はこの時 WILPF の御縁を切に感謝いたしました。私は一週間大学を留守にしました。やがてロンドンの英国文化振興会の本部から呼び出しを受けました。彼らはもし私が直ちに止めるのならばよし、もし続けるのであれば、何らかの結果がありうることを私に申しわたしました。私は「もしこれが他のことだったのならば、止めたでしょう。しかしこれは原子爆弾です。だから承知できません。留学生が政治介入を禁じているのは知っております。しかし、もし被爆者が、英国で冷たい仕打ちを受けた事を一般の日本人が耳にしたら、日英関係が悪化するでしょう」と答えました。落ち着き払ってはおれず、涙がほほを伝いました。その年の終りまで滞在は許されました。しかし奨学期間の延長は問題外でした。それは私の良心の問題でした。日本に帰り、代々木の社会福祉大学の社会福祉学科で日本の家族関係について講師をいたしました。」

磯野富士子が留学期間の延期を失う覚悟で、被爆者たちの通訳をするということに価値を見出した正義感は、やがてベトナム戦争の反戦運動に結び付いていった。

5. ベトナム戦争 (1955-1975)

磯野「1960年安保条約の延長法案の国会強硬を図った首相に対し、民衆の反対運動が起こりました。私は日本の民衆が内政干渉とみなす以上、アイゼンハウアー大統領のこの時期の訪日は日米関係に良くないと考えた多くの中の一人でした。私はアメリカ支部のミルドレッド・オルムステッド会長に毎日毎日なにか本当の問題かを手紙に書きました。そこから、私は世の中にはモンゴル研究の他により緊急なことがあると思うようになりました。日本の民衆の声をアメリカに届けなければなりません。そこでベトナム戦争に際しては、日本の新聞記者のベトナムからの記事を日本語に訳して毎日毎日、WILPF の同じく、オルムステッド会長に送ったのでした。私は第二次世界大戦中に日本政府が言論を統制して民衆が正確な状況を掴めなかった体験を覚えておりました。ベ平連(ベトナムに平和を市民連合)は日本の平和グループの一つでしたが私に協力して平和カードを印刷し、米国支部を通じて何千もの米港の兵士の妻や母に送り届けました。」

6. ラティモア・モンゴル学研究所研究主任として

オーエン・ラティモア (Owen Lattimore 1900-1989) は、アメリカの中国学者である。戦時期、中華民国の蒋介石の私的顧問となるなど合衆国の対中政策の形成に関与していたため、戦後は赤狩りの標的のひとりとなった。『モンゴル—遊牧民と人民委員—』の訳者あとがきに、「アメリカの学者特に中国学者を極度に臆病にしたのは、1950年、当時の「赤狩り」に狂奔していたマッカーシー上院議員が国連の技術援助調査会主査としてアフガニスタンに赴任したばかりのラティモア氏を、「最も危険な共産主義の手先として弾劾した事件である⁹⁾」と述べている。

Women for All Season では、“It’s still a mystery as to why McCarthy singled out Lattimore except that he was a China specialist and was saying publicly that it was a mistake for the United States to get involved in the civil war between the Chinese Communists and Chiang Kai-Shek.... But this campaign carried out by MacCarthy only succeeded in making Lattimore much more of public policy figure than he really was.”¹⁰⁾ 「マッカーシーはラティモアを実像以上に政策的人物として作り上げた」と述べており、この件に関し “a mystery” と意図的な告発であることを示唆している。

インタビューに戻ろう。磯野「WILPFの国際執行委員(1963-75)としてヨーロッパで毎年委員会に出席しました。ある英国のクエーカー教徒の紹介により私はオウエン・ラティモアに会いましたが、それまでは顔を合わせたことはなかったのです。彼はリーズ大学の大学院課程を編成中でした。彼と協力している中で、私はモンゴルに再び興味をかきたてられました。その中、ラティモア夫人が急に没し、外モンゴルの活仏(いきぼとけ)の伝説が未編集のまま残されました。ラティモア教授はリーズ大学退職の後パリに居住するようになり、私は協力の依頼を受けました。私は1981年までパリに10年住みました。それまでに共同で活仏の政治回想録の翻訳をなしとげましたが、それは一般の読みものとしてではなく、歴史文書として扱ったのです。その間私は自身の著作として『近代モンゴル革命』を1974年に日本で出版いたしました。」

磯野「オウエン・ラティモアは1989年に亡くなりました。私は20時間以上に亘る彼の録音テープから彼の回想録を採録、編集いたしました¹¹⁾。とても面白い語りであり、中国共産党と国民党との内乱時代における蒋介石総統との関係をも含んでありました。ただ一つ私が残念に思うのはマッカーシー聴聞会の悪影響でした。オウエン・ラティモアは決して政治的に洗練されておられません。ある人は彼の回想録の批評に「ラティモアが共産主義者でないように装っているのは弁解だ」と申します。また、最晩年には、モンゴル人民共和国を溺愛する祖父といった趣でした。彼はモンゴルが意図することはすべて受け入れ、時には真実を拒否さえしました。」

7. インタビューの終りに

磯野「振りかえってみますと、社会的 중요さからもうしますと、WILPFでの私の活動が私には一番重要です。子供から母への代弁者としての私の役割については、10人の子持ちの女性は原理は何も持たないのに、こどもを持たない女性は10の原理をふりかざすと申します。私は自分の子供を持ちませんから、私のいうことにはご用心ください。今日日本の女性は理論の上では解放されています。しかし上代先生や他の女性の大先輩がそのために戦ったことを、若い女性は当たり前としています。この安易な生活の結果墮落がはじまっております。昔の女権論者の情熱はうすめられたか

に見えます。現在私は1日30分ドイツ語を学習し、ピアノ、熟年のフラメンコ、日舞を楽しんでいます。また各外国語の文学を読み、只今「源氏物語」に親しんでいます。」

磯野富士子にとって最も重要な仕事は、「口碑集」の日本語翻訳やパリのラティモア・モンゴル学研究所の主任研究員としてモンゴル学研究についての論文、著作を発表したことだった。しかし、「振りかえってみますと、社会的 중요さからもうしますと、WILPFでの私の活動が私には一番重要です」と述べている。本稿では、平和活動家としての側面をWILPFとの関りから検討したい。まず、WILPFとはどのような組織であるかについて紹介する。

II. WILPF について

1915年、WILPFは、第一次世界大戦中には、ハーグで戦争の根本原因と終結について話し合うために12カ国から1,136人の女性参政権運動家が集まった会議に始まる。1919年、第2回大会がチューリッヒで行われ、会議は正式に「婦人国際平和自由連盟」(Women's International League for Peace and Freedom: WILPF)と名称を変え、世界で最も古い女性による平和団体となった。

ウォルサー夫人の「WILについて」という記事¹²⁾で、「(WILPF)の目的は、1研究であり世界情勢を知る。2他の人々に知らせる。3政治的、社会的、経済的、心理的面で平和を阻害しているものを取り除く。目的達成のための手段として、1. 全面的軍備撤廃 2. 暴力破棄 3. 和解による困難な諸問題の解決。政治的、社会的、経済的な面を平和的手段によって解決する」と述べている。WILPFは、紛争のない平和な社会を確立するためには、戦争の根源である貧困や軍事主義をなくす活動を展開する必要があることを指摘している。WILPFの運動では、軍備撤廃と人権の確立は不可分と考えられている¹³⁾。この3つの方針はWILPFの原点であり、現在の憲章に受け継がれている。

1948年、WILPFは国際連合経済社会理事会(ECOSOC)においてNGO団体としての諮問機関に認められている。この資格を得たことによって、市民の声を政策に反映するために国連や加盟国政府に働きかけるロビー活動を行うことができる。現在、WILPF国際本部は、安全保障理事会やその他の国連機関を含めた国連の民主化、安保理の拒否権撤廃などにも重点をおいている¹⁴⁾。

WILPFの最も評価された仕事の一つは、2000年、WILPFは組織連合の先頭に立ち、国連安保理に女性の平和と安全に関する1325決議を満場一致で採択させたことである。これは安保理が女性と武力紛争の問題に直接取り組んだ最初の出来事であった。

現在、国連安保理決議1325の適用範囲は拡大し、9つの決議が採択された。これらは総称して「女性・平和・安全保障(WPS)アジェンダ」として知られるようになり、フェミニスト分析とジェンダー正義の擁護による世界平和の推進を推し進めている。フェミニスト活動家たちは、国際社会が人々の安全を守るものは何かという問題のアプローチを変えるよう要求し、軍事的安全保障から人間の安全保障へと優先順位の見直しを求めた。家父長制、不平等、軍事化、権威主義、抑圧、差別的な構造は、女性の権利と活動への参加を妨げている。私たちは共に、断固とした協調的な行動を通じて、すべての個人が繁栄する、持続可能で調和のとれた平和な世界を築く活動を行う¹⁵⁾。

Ⅲ. 磯野富士子と WILPF

1. 国際執行委員として

磯野富士子は、WILPF の国際執行委員（1963-75）としてヨーロッパで行われる委員会に毎年、出席し報告した。磯野の恩師、上代タノは1954年ジュネーブの第12回総会で満場一致で執行委員に選ばれ「大変名誉なことであり、責任が重い¹⁶⁾」と述べている。

「世界に送る女性のメッセージ」という WILPF 執行委員会の声明¹⁷⁾では、「(戦争が) 普通兵器をもって始まったとしても、必ずや核戦争として終わることであろう。私たちは慎重に考えて斯かる戦争を始めては断じていけないし、またふとしたことから戦争に滑り込んでもいけない。唯一の解決の道は戦争放棄である。世界飢餓の回避のために、科学者たちに、よく考え及ばされることを要求する。」「世界の平和を考えるよすがにと、特に次のことを提唱する。①軍備縮小②平和的な紛争の解決③国連委員国であること④技術的援助⑤女性の地位⑥人権⑦人権の差別⑧国連に訴える権利⑨一般人の責任」を挙げている。更に、「戦争のない世界は社会的不正もなく」、「人権の憎悪もなく、国際法の制度が、自ら正しく行動しようとする人々に協定されて」、「個人を保護する世界であるに違いない」と述べ、WILPF 執行委員会は戦争のない人権が守られ個人が尊重される社会を求めて活動していた。WILPF の軍事撤廃と人権の確立が不可分であることが既にここにも見られる。

磯野富士子が執行委員として活動した時期は、ベトナム戦争と重なり、WILPF はベトナム戦争終結のための市民運動、反戦運動をもちあげていった。

1967年の執行委員会で、オーストラリア、モズレー夫人により、アメリカ支部からまだベトナム問題に関心の薄い、あるいは現政策に疑問を持っていないアメリカの世論を動かすための「ベトナム停戦援助を米国婦人に訴えるアピール運動」が提案された。「まず、WILPF がアメリカ婦人に訴える手紙を起草し、それに各国が自国及び連絡の取れる国の女性リーダーの署名をもらい、出来るだけ多くのアメリカ婦人団体に送る。その後、アメリカの WILPF がそれらの団体を招いて大きな会議を開き、ベトナム戦争を止めさせる道を検討する」という計画であった。日本支部は、市川房枝（日本有権者同盟）、WILPF 日本支部の上代タノ、菅支那など著名人の団体署名を集め、送った。

その後、日本人も署名した「ベトナム停戦援助を米国婦人に訴えるアピール」をジョンソン大統領夫人のもとに届けたが、大統領夫人自身は受け取らず、彼女の秘書はアピールを届けた人たちと有意義な話合いをしたという報告があった¹⁸⁾。また、磯野富士子はアメリカのドロシー・ハッチンソン会長からの「このアピールを受取った団体に働きかけ、「押し寄せる暴力の波に婦人はどう対処すべきか」という会議を開いた。「この会議の影響をはっきり測るのは不可能でしょうが、効果は決して少なくないことでしょう！」との報告をし、「フィンランド、ノールウェイ、スエーデン、デンマークの支部は共同で、スカンジナビア諸国の政府にアピールを送り、これらの政府が一致してベトナム戦争継続に関与しないこと、スカンジナビア諸国が共同して和平交渉に主導的役割を収めることを提言した¹⁹⁾」と述べている。市民の反戦運動が政府の政策に影響を与える可能性を示唆している。

2. ベトナム戦争と反戦運動

アメリカの北爆が始まると、ベトナム戦争の停戦と軍の撤退を求める要望書が日本でも出されるようになった。1965年5月 WILPF は他団体と共に「ベトナム紛争に関する申し入れ」をジョンソ

ン大統領と内閣総理大臣佐藤栄作に送った。日本支部も各国の活動に歩調をあわせ、ジョンソン大統領あてに、ベトナム戦争終結を依頼する電報を送った²⁰⁾。

一方、ベトナム戦争終結に向けて WILPF 日本支部の活動も活発になった。当時の会長菅支那子は、「1967年、5月14日にウ・タント国連事務総長が北爆が停止されればはなしあいも始められよう」と言っていることをとりあげ、平塚らいてうが立ち上げた「ベトナム話し合いの会」で作った英文のカードについて紹介している。

「このカードは磯野さんが作ったものを土台に「ベトナム話し合いの会」が、みんなで合作したものである。この反響は意外に大きくアメリカ支部でも同じものを刷り、オーストラリアからも喜んだ手紙が来ている。日本では同志婦人たち2～30人の他、男子2～3名も参加して横須賀の基地周辺で休兵たちに手渡した。私も雪の厳しい2月10日立川に出かけたが、日本の各地から何万通のかの手紙が来て反響を読んでいる。なお、日本の母親に訴えるため、新しく日本語でカードを作り、明日14日の母の日に数寄屋橋附近で手渡す予定である。会員皆様方のご参加を希望したい²¹⁾」と記事は結んでいる。磯野富士子らが中心になって作り上げたアメリカの母と妻へのアピールの図4英文メッセージは以下のようである。

To Mothers and Wives of United States

Yes, we have come thorough the same ordeal.
We sent out sons and husbands to war.
To fight communism and defend our lands,
To liberate Asia...., so we were told
We did not know, we refused to believe,
Our arms were killing innocent babes.
Nor did it ever occur to our minds
That we were hardening people's hearts against us,
There, in the lands which we were to save,
We tried so hard to convince ourselves.
That we lost our boys for a noble cause.
Is it true that their deaths were useless?
No!
If we can tell other mothers that their deaths were useless,
If we can spare other women the tears we have shed,
Then, we can say with deep conviction, and with relief,
“Their deaths have served the cause of humanity.”

Now, in Vietnam we see the tragedy being repeated
You send your sons and husbands to war,
To kill and be killed so far away from home,
To safeguard Free Asia...., so you are told
We appeal to you, we want you to remember

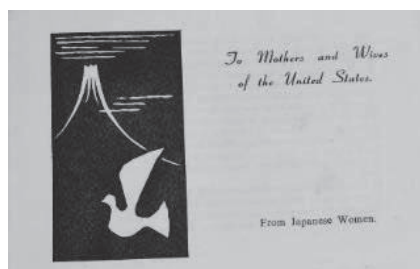


図4 アメリカの母親と妻への英文メッセージカード（サイズは葉書の大きさ）

You have the right to ask whether
Freedom can be preached with napalms and gasses.
You aren't forbidden to reason why
You pay so much to create enemies.
To support a government unpopular with the people
You are citizens entitled to demand :
Is all this really worth the sacrifice?
Sol
You have power to let your dear ones come back to you.
You have power for building a home-land of the free.
How we yearn to hear you say, for the whole world to hear,
"Peace, not war, will save our democracy."

From Japanese Women

第二次世界大戦で戦死した兵士の死を無駄にしないことは、今、ベトナム戦争に夫や息子を送り出しているアメリカの女性に涙を流させないこと。つまり、戦争を止めること。もしそれができるなら、“Their death have served the cause of humanity.”そして、世界は、“Peace, not war, will save our democracy.”という言葉に熱望している。民主主義は救われるに足る価値がある。この小さなカードが多くの人々の手に渡り共感の輪を広げた。

もう一つ別の“To Mothers and Wives of the Countries Participating in the Vietnam War”というメッセージカードがある。「今日も明日も、あなたたちはサイゴン、沖縄、横須賀からのニュースを待っている。愛する人の無事を祈りながら」と始まり、戦場での兵士の肉体的、精神的苦痛を訴え、母親たちは平和への思いを募らせている。最後には「平和を願うすべての母親が、愛する人と再会できる日まで、手を取り共に耐えましょう」と、慰め励ましあう母親たちの連帯を呼びかけている。

2016年、11月25日付け、『朝日新聞』にこのことに関連する記事がある。「新聞と9条386 女たちは書いてきた37」から、「他国の戦争にどうかかわるか？ベトナム戦争で女たちは新しい課題に直面した」と書き出し、ベトナムからアメリカが撤退するよう要請することが現実的ではないとの批判がある中で、「国際的に広がった反戦運動はあった。66年平塚らいてうら19人は「ベトナム話し合いの会」を作り、米国の母親に反戦メッセージを書いたカードを贈る運動を始めた。68年1月には、朝日新聞に掲載されたルポ「戦場の村」を評論家の磯野富士子が訳し、1か月で約2万部が売れた」と述べている。反戦運動は政府の過ちに気づかせることであった。WILPFの女性たちは、磯野富士子らが作った、ささやかなカードを武器にベトナム戦争反対を訴え、戦った。1968年、ジョンソン大統領は、次期大統領選不出馬を決め、北爆の部分停止と交渉を開始し、パリ会議が始まった。この反戦運動に関して、「ベトナム戦終結について、米国内ではWILPF本部会長のハッチンソン博士の努力が米国の識者・指導者・大衆を動かした」と野見山不二は賞賛している²²⁾。しかし、ベトナム戦争終結には、さらに7年を要した。

IV. 「磯野富士子・A. モスタールト記念文庫」について

清泉女学院芝山豊教授が磯野富士子から研究資料の保管を託され、1999年当時、清泉女学院短期

大学図書館長であった北原明文先生に相談の上、清泉女学院短期大学図書館に「磯野富士子・A. モースタールト記念文庫」として保管されることになった²³⁾。

「本学の建学の精神、カトリックのヒューマニズムを特徴づけるコレクションの一つとして、大切に育てていただきたいと思います²⁴⁾」と芝山教授は述べている。資料 図5、図6。

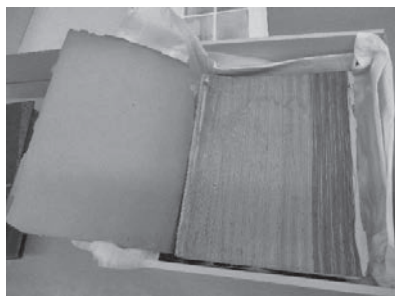


図5 ほつれた本を布団の布で綴じた『オールドスロ碑集』(牛山撮影)

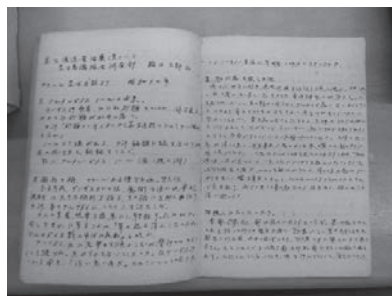


図6 翻訳ノート(牛山撮影)

おわりに

磯野富士子は戦前の旧弊な家父長制に基づく抑圧的で自由に発言することが許されなかった社会の因習に従うことができなかった。また「人民の権利を主張する声は、いつも「赤」という札を貼られ特高によって弾圧されました²⁵⁾」とも述べている。言論の自由が抑圧された時代に生きていた彼女に、戦後、大きな影響を与えたのは、民主主義であった。しかし、民主主義国家にもかかわらず、磯野が見たアメリカは、反共産主義に基づく共和党上院議員、マッカシーによる国民を不安に陥れる赤狩りであり、ベトナム戦争であった。磯野富士子は「ベトナムに平和を」と反戦運動に立ちあがった。戦争によって失われる命を救うことは、民主主義を守ることも意味していた。つまり、小さなメッセージカードの最後には、“Peace, not war, will save our democracy.”と訴えた。この反戦運動は、磯野富士子らが他国の WILPF を巻き込んだ平和を取り戻すための活動であった。世界的広がりを見せた市民の反戦運動によって、ベトナム戦争は終結への長い道のりに向かって動き始めた。

磯野富士子が意義深く考えていた民主主義が、現在は、様々な危機に直面しているという。果たして生き残れるのであろうか。宇野重規は、「私は民主国家の拡大こそが、短期的には例外も多いのですが、長い目で見れば、戦争の抑止につながっていると思っています。」また、「人類は民主制を生み出し、過ちを繰り返しながらも、国際的な秩序を作ってきたわけです。(略)私はトクビルの言うように人類が民主制から逆戻りすることなく、長い目で見れば、民主的な国家が増えていくものと信じます²⁶⁾」と語っている。磯野富士子は日本支部の平和運動へ次のような提言を残している。「平和運動が日本だけの狭い視野にたつもので満足しないで、世界の動きに目を向け、世界と共に動くものであって欲しい。平和運動を一時的なお祭り騒ぎとせず、会員一人一人が平和のためにすべきことを掴んで、誠実に行動してほしい²⁷⁾。」国連の諮問機関の資格を持つ WILPF への期待は大きい。今、ウクライナとガザの惨状を目の当たりにし、平和活動をどのように考え、展開させていくのか、困難な課題を突き付けられている。

註

- 1) Forster Catherine. *Women for ALL Seasons ~The Story of the Women's International League for Peace and Freedom*. UP. Geogia, Athens, 1989 (pp.138-139).
- 2) 磯野富士子『冬のモンゴル』中公文庫、中央公論社、1986年。
- 3) 前掲書、231頁。
- 4) 前掲書、230頁。
- 5) 芝山豊、特別寄稿「磯野富士子・A. モスタールト記念文庫」について、*HUMANITAS CATHOLICA* Seisen Jogakuin College Volume XI 2021、36頁。
- 6) 東洋文庫59『オールドソ口碑集モンゴルの民間伝集』A. モスタールト著、磯野富士子訳、281頁。
- 7) 芝山豊、前掲書、35頁。
- 8) 磯野富士子『冬のモンゴル』233-234頁。
- 9) オーエン・ラティモア著、磯野富士子訳『モンゴルー遊牧民と人民委員―』岩波書店、1966年、300頁。
- 10) Forster, op.cit., p. 140.
- 11) 磯野富士子編・訳『ラティモア中国と私』みすず書房、1992年。
- 12) 『婦人と平和』第3巻第5号、1953年6月1日発行「WIL について」ウオルサー夫人。
- 13) 中島邦・杉森長子『日本女子大学叢書1 20世紀における女性の平和運動 ～婦人国際平和自由連盟と日本の女性～』ドメス出版、2006年、162頁。
- 14) 前掲書、161-162頁。
- 15) WILPF ホームページ、<https://www.wilpf.org>、WOMEN, PEACE & SECURITY 2024/06/27。
- 16) 『婦人と平和』第4巻第7号、1954年7月1日発行「上代会長本部国際委員会出席中止」。
- 17) 『婦人と平和』第5巻第9号、1955年9月発行「世界に送る女性のメッセージ声明文」。
- 18) 『婦人と平和』第15巻第1号、1966年4月発行「「ベトナム戦争終結をもたらすためのアメリカ婦人へのアピール」その後」菅支那子。
- 19) 前掲紙「国際会長の通信」磯野富士子。
- 20) 前掲紙「「ベトナム戦争終結をもたらすためのアメリカ婦人へのアピール」その後」菅支那子。
- 21) 『婦人と平和』第17巻第2号、1967年6月発行「42年度の総会に当たって」菅支那子。
- 22) 『婦人と平和』第18巻第2号、1968年6月発行「1968年へのヴィジョンと実践」野見山不二。
- 23) 芝山豊、特別寄稿「磯野富士子・A. モスタールト記念文庫」について、40頁。
- 24) 芝山、前掲書、45頁。
- 25) 『婦人と平和』第2巻第11-12号、1952年12月発行「アメリカ国民の良識」磯野富士子。
- 26) 宇野重規「民主主義は生き残れるか」<http://www.toibito.com/toibito/articles/> 戦争と民主主義、2024/06/27。
- 27) 『婦人と平和』第27号、1979年12月25日発行「WILPF 国際評議委員会」(文責 大藏)。

参考文献

Catherine Forster. *Women for ALL Seasons ~The Story of the WOMEN's International League for Peace and Freedom*. UP. Geogia, Athens, 1989.

HUMANITAS CATHOLICA Seisen Jogakuin college Volume XI 2021

磯野富士子『いつのまにか英語でしゃべれた一私の十戒―』中教出版、1985年。

磯野富士子『家族の中の人間』筑摩書房、1962年。

磯野富士子『モンゴル革命』中公新書、中央公論社、1974年。

磯野富士子『冬のモンゴル』中公文庫、1986年。

磯野富士子編・訳『ラティモア 中国と私』みすず書房、1992年。

上野千鶴子編『主婦論争を読むⅠ全記録』勁草書房、2008年。

上野千鶴子編『主婦論争を読むⅡ全記録』勁草書房、1984年。

宇野重規『民主主義とは何か』講談社時代新書、講談社、2020年。

中畠邦・杉森長子『日本女子大学叢書 1 20世紀における女性の平和運動 ～婦人国際平和自由連盟と日本の女性～』ドメス出版、2006年。

A. モスタールト著、磯野富士子訳『東洋文庫 オルドス口碑集～モンゴルの民衆伝承』平凡社、1966年。

オーエン・ラティモア著、磯野富士子訳『モンゴル—遊牧民と人民委員—』岩波書店、1966年。